五家集

五家集

俊成 定家 家隆

寂蓮 西行

全

特別
へ4
8071

俊成卿　定家卿

へ4
8071

<95-271>

俊成卿歌集

立春

けふといへはもろこしまても行春を都にのみと思ひけるかな

若菜

沢におふる若菜ならねといたつらに年をつむにも袖はぬれけり

子日

さゝ浪や志賀の浜松ふりにけり誰か世にひける子日なるらむ

刑部卿頼輔歌合し侍るによみてつかはしける

きのふまてあらしは若菜摘し野にけふはなく行きかふの花

千五百番歌合に春哥

いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのゝ花

春の歌とて

駒とめて猶水かはん（飼）山吹の花の露そふ井手の玉川

入道関白右大臣に侍る時百首読せけるに　郭公を

むかしおもふ草の庵のよるの雨になみたなそへそ山郭公

雨そゝく花たちはなに風すきて山ほとゝきす雲になくなり

徳大寺家に十首歌よみ侍りに

ふくるよいりかたちかくなりにけり雲井の月は清かけになくらむ

述懐の心をよみて百首よみ侍りける時

なふかはかはらぬ色やめの袖さへうけかへてころもを乾されぬ袖の玉

根こと音のすゝて述懐の涙をもとめかねつひ考ふるや

感傷の事に昔の人をおもひ出て如く終に〔illegible〕世なれはこそ昔の人をなれは誰か又如くおもひ出んとし

〔illegible〕りける夜もすからおもひ出ん行末もむかしのひとく〔illegible〕

千五百番歌合に

大井川かはらぬ世ゝのいく瀬に〔illegible〕川の〔illegible〕

百首歌よみける時

伏見山すむ川のうけとりこゝろは〔illegible〕田面に〔illegible〕

（山城の伏見）

崇徳院に百首歌奉る時

見し〔illegible〕山田に〔illegible〕て又袖ぬるゝと〔illegible〕

素首云みすかは水の流しみさひなとにも〔illegible〕秋は〔illegible〕桜〔illegible〕て

又袖ぬるゝともと交秋かけて艱難のさまし

萩の葉もちきりありてやあきかせのおとつれそむるつまとなるらん

七夕

つまとは端をいふ心

萩も前世の契約ありて秋風の音信も初るなるへしとなり

〔illegible〕のこゝろのうちの〔illegible〕いくあきかきくれ〔illegible〕の玉章

入道前関白右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りけるに

いとゝしや袖はしほれし〔illegible〕いて〔illegible〕もあれのたまふ〔illegible〕て

老後かは弱りも見るかも盛者必衰の理感せらる又来ん秋は存命も知らす心細く若年に〔illegible〕と袖の〔illegible〕

入道前関白家に百首歌よみ侍りけるに

〔illegible〕やまさとは〔illegible〕山中川は〔illegible〕のかは

千五百番歌合に

〔illegible〕秋流れつゝのおとの〔illegible〕やきあらん

〔illegible〕しらと

滝水瀬咽流不得と白氏天の詞

〔illegible〕川〔illegible〕の声

守覚法親王五十首歌よませ侍りに

〔illegible〕池のこほりのとむ月に〔illegible〕て袖にもうつりぬる

池の水にとむ月のやとりて〔illegible〕寒き夜の感に堪ぬ袖の涙も〔illegible〕月のうつる〔illegible〕

後徳大寺の〔illegible〕

ふかりし花もやうつりてかはれハ中さにともなれ庭の雪かな

守覚法親王五十首詠せ給ひけるに

さかきハミのまさかきの色かへて月にみかけるはのくもる
（眞榊）

さかきとは天のかく山の吉坂樹の事 日本紀に有

千五百番歌合に

ならはとりもやうつろひとおもひめとも又もとしに行ひに行るかな
（年の花ともに老ぬる来年の花にむかへる事ハ知らず今年も惜と思ひて行年を惜むとて花をおくりて又も今年の暮春かな事とし）

文治六年女御入内屏風歌

千人の袖のかきくの家うちもつかふもちよハ限なく

祝の心をよみ侍りける

君か代ハ千世もさかしいくのやいつも月日のかはりなけれハ

仁安元年大嘗會悠紀方稲舂歌

あふみのやさかたのいねをかけ法そてみちの代をもめるを待く

母のためにて侍りける秋法輪寺にこもりて嵐のいたく吹けれハ

うき世にハいまハあらしの山風にこれやなれゆくはしめなるらむ
（母のためにこの山寺にこもりて世をも捨んの心にて今はいつしかと見えて世をすてて山居せんには只今の山ごもりや山風に馴初めなるらんとし）

道家母かくれ侍りける秋摂政のもとにつかハしける

かきりあれハしのふの道の袖のうちハかわくもありとしことかなし
（母の服の限りもあれハ服ぬきて袖の色のかはるにつけても猶恋しのふ心ハかはらすとて歎き悲しき事ハ一かたならぬと也）

御かへし

△ 権中納言道家母 道家公後京極摂政ニ号ス光明峯寺ト
母ハ権中納言能保女

うつせみの旅のけしきと見えすとも老ハあらしもえなきかめ

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに旅の心を
（假初の旅なれハさまて歎くきにあらすと思ふれとし）

吹刈の野のかりねもあはれなり玉江の月の明かたの空

ものうくてもきこえしとこそ嶋山の
（芦火たく賤の家に宿りてあはれもあはれさ身の上を思ひやるとかハ宿の事まて思ひ入て思ひ侍るとかなしき只我ならぬ不意事と也）

旅の心を

鳴法ことやあるふかきもあれ
とき祓ふ袖の色かはりけり

旅の心を

世の中ハうきにあしたの宿のさかしあきとハ妹背ふこそ
（世をうしと捨て旅に出れハ志の事の御きかり妹背を見ても故郷も有世ハうきの歎きかなしき篠の縁にてとこと也）

偲谷のあるを
あるのろこのあひ沖ふゆく人は行くあかつきの浦そこの子ひとつる

雨のふる日女につかはしける

ふひあかり木のさこの浦そ詠まハつれなく結ふりて是あらて小琢
百首歌よみしにされ

ふかゝりし宿もやかてあれぬれはまさきのかつらもあれし庭の苔かな

守覚法親王五十首読せ侍りけるに

さかきはゝ日のまさかきもて身にみそき[illegible]のくや

まさかきは天のかく山の真坂樹の事日本紀にあり

千五百番歌合に

ふるさとにたのめし人も末の松まつらん袖に浪やこすらん

年の名ミに末の松の末年の[illegible]今日[illegible]といひて行年を惜とつまてと往てまた今年の暮春かなきとし

文治六年女御入内屏風歌

山人のおる袖にほふきくの露うちはらふにも千代はへぬへし

祝の心をよみ侍りける

君か代は千代ともさゝしあまのとやいつる月日のかきりなけれは

仁安元年大嘗会悠紀方稲舂歌

あふみのやさかたのいねをかけつみて道ある御代のはしめにそつく

母のおもひに侍りける秋法輪寺にこもりてあらしのいたく吹けれは

うき世には今はあらしの山風にこれやなれゆくはしめなるらむ

母に[illegible]山寺にこもりて世をも捨への[illegible]かくて世をすて山居せんと只今の山[illegible]山風に馴初めなるらんと

道家母うせ侍りける秋摂政のもとにつかはしける

かきりなきおもひの程の夢のうちはおとろかさしとなけきこしかな

限りなき御歎きなれは[illegible]夢のうちの[illegible]なけきて[illegible]

△ 権中納言道家母 道家公後京極[illegible]光明峯寺ト[illegible]

母ハ権中納言能保女

かりそめの旅のわかれとしのふれと老はなみたもえこそとゝめね

仮初の旅なれはさまて歎くへきにあらねとも老の[illegible]

守覚法親王家に五十首歌よませ侍りけるに旅の心を

夏刈のあしのかりねもあはれなり玉江の月のあけかたの空

立かへり又もきて見ん松しまやをしまのとまや浪にあらすな

此歌を定家卿ハ[illegible]歌の心ハ[illegible]

入道前関白家百首歌に旅の心を

難波人あし火たくやにやとかりてすゝろに袖のしほたるゝかな

述懐百首歌よみ侍りけるに旅の心を

世の中はうきふししけし篠原や旅にしあれは妹夢にみゆ

世をうしと捨て旅に出れハ志の条の[illegible]妹を夢見て又故[illegible]世ハうきふし[illegible]篠の縁にてしけしといへり

あ[illegible]ころあはれにゆく人[illegible]さの浦そこのよひなる

雨のふる日女につかはしける

おもひあまりそなたの空をなかむれはかすみをわけて春雨そふる

百首歌奉りし時

述懐百首の内の恋思の歌也 つれなき人の心に同心なく身にかけて [illegible] 道世捨身の [illegible] 心に同心とふりんとし [illegible] 本
[illegible]

のに[illegible]ちかう[illegible]ものゝ[illegible]
[illegible]

千五百番歌合に
しらさりき後の世まて[illegible]
[illegible]

崇徳院に百首歌奉りける時
[illegible]

入道前関白家百首歌詠侍けるに立春の心を
年くれし涙のつらゝとけにけり苔の袖にも春やたつらん

入道前関白家歌合に
今ハ我よしのゝ山の花をこそやとのものとも見るへかりけれ

春来れハ猶此世こそしのはるれいつかハ此花を見るへき

同し家百首歌に
てる月も雲のよそに行めくる花そこの世の光なりける
[illegible]

秋の月[illegible]世そのれ[illegible]又のとしの秋九月
十日[illegible]月[illegible]
[illegible]

[illegible]

述懐百首の内の片思の歌し つれなき人の事に同心なる心に付て よき身ハ世に亦さへいとひて遁世捨身の心をすさまじく又も身に いとひ身ハ其いとふ心すら身に同心とふりんとしいふいとふ六本 意なるへきなるをうたにつけて同心あれはなるてかへるとこそ いかにしてかくれてもいへし

のふさ見ちりわか世の方々
みちのくしたおもしいさとなれん

女に代りて

千五百番歌合に
ちしさらは後の世とてもたのまれすつらさをいかにしのふ身をこそ
つらさに堪へて又なくもあるを（とふ）ハ後の世ハ来んと契りしとしもさいへと いとふしく此世にかなしきあらまし

崇徳院に百首歌奉りける時述懐
あはれなりうき身のすゑのなかれ行なきひともかれとまえ
是ハもろきの袖を落して涙の行末に只わくて袖にこし浅のあの風の行末もなく心にひきかるとも忘れとうらんハ哀きこしと なるへし

おもひ侘ひうき身のはてハさそれてたのまれさりけり
あるのいのちも身とはりなれハちかりなしあるかの袖てこし袖の恋きハさりとてもなし世ニハ世さりしおもひさきとなく

入道前関白家百首歌よみ侍ける時 立春の心を
年くれし涙のつらゝとけにけり苔の袖にも春やたつらん
老後出家の後の歌なれハ年の暮て惜こなし 涙の事の今と年しハ家を出世ての身 苔の袖にも春もちかやとし

世をのかれて後百首歌よみ侍けるに花の歌
今ハ我よしのゝ山の花をこそ宿のものとも見るへかりけれ
遁世の身なれハとし世に行末をすゝめんは此山さくら花を宿のものとこそとし

入道前関白家百首歌に
春くれハ猶此世こそしのはるれいつかハかゝる花を見るへき
死て後の世にはいつかかる花をこそ見んと 是ハ行此世の名残の花ハけしきとし

同し家百首の歌に
てる月も雲のよそにそ行めくる花そこの世の光なりける
世のうちに光なれ月ハ上界をめくりて他の世界をもてらし 花あれハ此世の花ともいひくし 此下界にての光ハ花にあく とかなとも
摂政殿と申けるときよまれしとき

述懐百首歌の中に 五月雨
さみたれハまやの軒はの雨そゝきあまりなるまてぬるゝ袖かな

永治元年譲位ちかくなりぬる夜月をよみて
わすれしよわするなとたにいひてまし雲井の月の心ありせハ

秋のよの〇〇〇ふやまいかになりて世をのかれ侍りける又のとしの秋九月
十日行まり月くまなく侍りけるに侍りける
あはれ秋ハ去年世をのかれて此世の月に〇〇れ 其秋に二度逢て此月をミえとハいかならん
ありしにもあらすやあけれは秋にめくりあひてまたもこの世の月をみえとハ
いかにもとし病み浮世むこあれは同あれハあへし

八十になりて後詠める
しめおきていまやとおもふ秋山のよもきかもとにまつ虫のなく

千五百番歌合に
あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなん露の夕暮

なみならせて述懐の心をよめる
杣山やこすゑにおもる雪折にたへぬなけきの身をくたくらん
杣山ハ材木を切出す所にし 絶ぬ歎きの身をくたくといひん序歌し 雪折にも其のなけきの心をそへてよめるなるへし

[illegible]

此歌の心ハ老果て何をも知らぬ身なるゆへ又も暮春に逢んとて涙の玉を手向とし旅行人に手向とて送りぬるハ其道中無事にて又逢見んの祝言なれハ行年と読て旅する人のはなむけに盃をさして涙を流して玉となして[illegible]行年の暮に涙の玉を手向つるとなり[illegible]此歌実に又も暮春に行んとて手向[illegible]老の暮春の[illegible]涙の玉を[illegible]

山[illegible]清ら[illegible]

[illegible]の乙女子

いふせん[illegible]の[illegible]流れ[illegible]の竹[illegible]も世の[illegible]

垣[illegible]

歌の心ハ[illegible]天子の[illegible]千秋万歳と[illegible]臣下の心[illegible]

公[illegible]とて書あつめたる人さへ世の中に[illegible]

述懐百首歌よみ侍りける[illegible]

[illegible]

述懐百首歌よみ侍りける時

[illegible]

[illegible]の[illegible]の日[illegible]

源氏[illegible]

[illegible]の[illegible]

百首歌よみ侍りける[illegible]懐旧歌

むかしたむかしと[illegible]の[illegible]

[illegible]定家[illegible]中納言将任の事[illegible]

民部卿範光かもとにつかはしける

野州云凡ハ無常の風しきり[illegible]

小笹[illegible]

千載集えらひ侍りける頃人々の歌をこそて

[illegible]

[illegible]無常の歌

世の中をおもひつらねてなかむれはむなしき[illegible]

入道前関白百首歌よみ侍りけるに

[illegible]

文治六年女御入内屏風に臨時祭かける所

月さゆるみたらし川に影見えてこほりにすれる山藍の[illegible]

入道前関白家に百首歌よませ侍りける時　神祇の心を

[illegible]の[illegible]水を[illegible]

待賢門院中納言[illegible]八十八品の歌[illegible]

詞しと

老ぬとも又もあはんとゆくとしになみたの玉を手向つる哉

太神宮に奉りける百首の中に 若菜を

けふとてやいそなつむらんいせしまや一志のうらのあまの乙女子

正月七日あれハ若菜をつむとよ

山家松といふことを

歌の心ハ捨し身の上にても天子の御事をハ千秋万歳と祝奉りし讃ニ臣下の心あるへし

今ハとてつま木こるへき宿の松ちよをハ君となをいのる哉

述懐百首の歌よみ侍りける時

いかにせんしつかそのふの奥の竹 垣籠るし かきこもるとも世の中そかし

題不知

古音云住吉の神といふ人の歌ニ合せて松とよめり 又我も此けて来る方を松に比して神にも寿やうけ(?)しへとの心なるへし

うれしくもさしてそ世はなにゆゑありてやくそし住吉の松

述懐百首歌よみ侍りける時 鹿を

源氏若菜の巻に又ハ吹風につけてたにあはれなるけふの暮き御涙也て光りへせまりそとき時刻を見ゆへし

あはれしるこゝろのたちの日にそへてあらく鹿あることそ

暁の心を

あかつきとつけのまくらをそはたてゝきくもかなしき鐘の声かな

百首歌よみ侍りけるに懐旧歌

むかしたにむかしとおもひしたらちねの猶恋しきそはかなかりける

年ひ侍りにおくれて後ハ定家新中将の将位の事申とて（次ぎハ中将に将なる事あるへし）

野州云此ハ無常の風も家ハ今しそれと小笹の露ハ終焉の夕を示すへし これハ家の道を子の将位の事を心かとし

民部卿範光かもとにつかはしける

小笹はら風まつ露のきえやらてこのひとふしをおもひおくかな

千載集えらひ侍りし比 好き人々の歌とて

ゆきを侍ハ家油も志のふにもやあらんむかしをおもふこゝろあらは

崇徳院に百首歌たてまつりける無常の歌

世の中をおもひつらねてなかむれはむなしき空にきゆるしら雲

入道前関白百首歌よませ侍りけるに

稀なりやいはほの涼こやそしらいくちよもあとしるそそめけん

文治六年女御入内屏風に臨時祭かける所

月さゆるみたらし川にかけ見えてこほりにすれる山藍の袖

入道前関白家に百首歌よみ侍りける時 神祇の心を

春日野のおとろの道のむもれ水すゑたに神のしるしあらはせ

待賢門院中納言人にすゝめて廿八品の歌読せけるに

廣渡諸衆生其数無有量の心を

にてもとへきうともかきりなき衛をしらいふるてゝ涙ちらひなかるゝむ
斧福の浄に極楽六時讃の絵にかゝ浄へき給まれと作りゝ暁に
大衆法をはけていよく歓喜瞻仰せり

今みれは見え入日さしてもかすみし浄しこの浄国の樹ふくれの浄り
暁ひかりて波の声人今の岸にうつりけ
いかにへのおのへのうゐすかゝるう飛しきこゆれあこの行り浄きの声
右六十八首新古今かのせきてう

家集
こゝろまハあかまとそなりて照日うちもれ岩絵山よさけろ竹のさは
さやか月さらるれなむちろめくや四方の行中雲なく捨らん

夫木
ちゝの山を飛ややちゝらん天漢河雲の清くさひくり出るあそこ

玉葉
岩竹ハ春風いとまあらく行とくくなる極りのわきさや流水

新勅
朝戸あけて伏見のさとにながむれハかすみにむせぶうぢの川波

千載集に　臨期遠約恋
かねていきやおもひのふしゝはのこりけるなげき清めて百夜もかすかし帰らせんとハ

夫木
松かけしはしとすゝしき岩まハ岩まの水にて恋行ハあるかな

類説
岩かねの久の浄深谷流かひさ男よあるとちせ浄きろきしのうの家

家集
世の中ハ岩戸にふせくさゝのまの心これまてぬけ出るなをまされ
文治六年女御入内御屏風に
ちゝ代よ行ふさゝ竹戸の岩水もうけ出るゝなかれも月流こすし

夫木
山さとハ秋さかりなる琴のおとかな田の浄出るハちゝよ給ひかな
正治二年百首

秋のくれ見わたしゝよの中にさしかゝり田のかりふかくるかな

小倉入道家五十首

岩ヶ代ハ見くや中に法界の室明むかしこの蛇ふかふ中まて

岩の室ハ大師入定の居所

類記

山ふめや岩かれかくれさいすくん中にちらさる法袖のこえはなれ

さいかくハ戯論也

五社百首

ありし山の谷のうきゐのあやめ草ありしひとかにも袮やかゝ涙かな

枕かへてありしはいつ雲のうへのありしにゆめみし草のとのふ

後法性寺入道関白家百首

巻向の玉きのうてやにかくれハさうふむかしのあしとこそ見ゆ

巻向の玉きの宮ハ垂仁天皇の皇居也

五社百首　後徳

巻向やかたち穂ふきしけしゝ山さかゆくよひうしをうけて田つくるなり

巻向にて女ともの苗植捨の事いせ物語にみえたり

難波女かいつしの志のや志のとしれ知とよの姫しも忘れやハきたる

恵みゆふハあまりしやとありのかうしらふかうりの山辺の清さにかゝる居

祇園百首

青のうちもかりかりありけふなそうるに西のみとよの石清きさかし

西のこと　祇園にとあり

千載集に

家ゐして思ふころの呉竹ハ千世にいくよのうけしかよかるらん

白楽天北窓に竹をうへて愛して朝夕ともに是事行し文集にみえ

かう詩にも唐の太子の賓客白楽天愛して為二吾友一ト云云

晋ノ王子猷ハ竹を愛して称ス二此君一ト

夫木

陰きよしあくへのかう木ふかうはりきて第りの樞もとをかくせそころ

あくへの木ハ七重宝樹也

続古今

妙なる花のうへのあらしの中川の水のおとふかくいとゞにこそなりけれ

家集

志賀のうらの花のさかりにちる花をさそふ嵐を袖にたちかへれ

西行法師

志ら川やまつの下ゑにかよふとて袖ふきかへす秋のよの世や

玉葉

こほりしけ井手の下帯ゆきあひてよかせられきゝ玉川清水

五社百首

くれなゐの花のかの萩が露こゝろをしぼる月のうち

家集

明るには池清水も影うつれは玉のをそれぬ影たえて

夫木

芦辺の都とをり行ぬ難波のみなと沖にいてゝもこれあけくとや

良山百首

志ろやいつみに清水のかけの袖いたゐこゝろの志めも分ふかうけりとは

精勇潔斎し　注連

桜狩

此歌の注にさくらかりハ交りこゆるを見ゆる狩ハかくしと
定家卿の説し野州云交野ハ此次の贄の道地なり
又桜も狩所し故に狩といふ縁にて桜狩とハいふ又その
君のよくしられ署の行る由此世のやとも見へぬ也
面白き歌也今の世ハ又あひさしとなるを得て詠り
歌し風情有られ歌し沙野とよふも交野の事し今の
乗ハ四ツる署と弟と書と交野しかしも分なる也
あまりに興して詠りし又やとえんふ又や見さらんのなきら
定家卿の沙汰云云

千載

弥陀の浄国の名の花の

又やみん交野のみ野の桜がり花の雪ちる春のあけぼの

さゝれハくもの名なりうち志めしかられ内さるを面の故人

宗祇云五月雨の比ハとうふ五文字し玄旨云藻なとくれ集めてさくハ雨湿てさりんたまれとうち志めてのしめらて焼侘て次ちの

新古今

志め多てしやとおのふ秋山清水なきりれふ中川ひしの末く

此歌前ふ出たり

新勅撰

いつかせんおとのさゝてびうちくしうらくても行ることのわ世也

海士のさそてハ定家卿歌なりけり

身の人もおこその実の吻子なることてけり　野路清玉川

摂政太大臣の家に百首の歌よミ侍りける時　神無月の比にて

ぬるかなるくれのうへの玉川のさとのおもしろいひとにもみゆん

家集

しほかせにとこおろのあくしふちか行まえるしとを袖ハあられ色

為忠百首

しは川やよしあかるのやまさとにかさてて袖ふさいかのさとのせや

玉葉

こよひくし升子の下帯ゆるめりさふせうすきき玉川の水

五社百首

くれなゐの行しのゆかのなゆへこころをとしのうるを

家集

明るこハ池流をちもともおもふれハ玉のそうれかうなへなり

夫木

芦のむをとこを行のゆ難波の沖にいてもこれあかりとや

亀山百首

しろやいうふあさそうしの袖いゆるころの志めもならん川とハ

精身潔斎し

注連

摂政家に五十首歌よませ侍りけるに

せきやこえ このくさくくてすまのこゑを見て涙おさむの

玉葉

又こえひ行しの山のぬりし寺杉流いかりや余行り行きの清き

新六

いくよかさこの入日見てもかめひとし弥陀の浄国のなかれの元

千載

さゝれいしのなかりうちしめゆしなかれ海さるとも雨の海人

宗祇云五月雨の比ハとよみ五文字し去旨云藻屑とりし集めてくらハ雨湿てさらんをあれとうち志めてのちあるて焼捨て次十の歌し

新古今

しめ結てしハしとおもふ秋山流をあきかのかふ中川ひとしのあく

此歌前ニ出る

新勅撰

いふせんあまとのさくてしうちくしうらうをも移らく行ろせん

海士のさそてハ定家卿詠事えくう

むかし人もかこそのうへの中にところてかへ給ふ野路流玉川

摂政太政大臣の家に百首の歌よませ侍りける時 袖の色の色

千載
からしもろこしもとの志てさ家やいまちろ袖ハくし志ゆらん
　をばすてに入りし袖の涙の事をいひとて家の人のある堀山の家にわすら
　くおもへとし

同
いふせんむろの八嶋にもかなこひのかゞゆらふゆらん
　志のかゝ恋
　室恋の八嶋をいふ人にえせかけしかれともさだかにいひ出るかれハふかせんを
　といひてせめてといひ出る也し下野の室の八嶋の火岩から室恋の烟を
　火かまくて彼人にえせんとしもとし詞にいひ出る不思恋の心をよし此歌
　千載集秀歌十首の中の一首也

同
かなひきやしらのちうのれかきをしめてもふ秋もかなし九そせんとハ
　法住寺殿上の歌合に　臨テ期ニ遠ク約ス恋といふ心を
　榻のしちはしらの事し九十九夜榻にかよふて百夜ニハ来んといひ
　しに彼さうかてかりつハ臨テ期ニ変スル約束ヲ一也とし
法住寺殿にて五月の御供養の時かのことも歌よみて侍りけるに
契テ後隠恋といふ心をよみ侍りける

五月の御供養とハ院の最勝講の時の事として最勝王経を講せらる
御事て五月の御のつとも年中行事歌合にもあり　法住寺ハ後白河院

同
かのめくしかへのこちかくものかくしいつもかくらんもとの草ぐれ
　万葉オ十　春されハ伯労の草ぐきえ見ねとも家ハそなたとみるらんの
　歌林良材云　清輔奥義抄にハ鵙の居る草の茎をいふ家ハ彼
　人にハ見えんそなたにのみ思ひやりて見るなり
　まかせて後吟云此後成
　くのめ見るし
　しもえんとの
　謂ニ二条家の正風体なるへしと云云

　八重垣云もとの草茎といふ事にちかせていふハ昔男野を行に女に逢て此後必其女を
　女の住里ハいつくそといふに女答ふの草茎の〔一字不明〕てさして家住里ハ草茎の〔一字不明〕
　あると教へてさり次明年彼男行て野に行て見るに家見えず神ハ空し
　帰りし故事とも〔不明〕にかく謂ふ　△又云もとの草やとりといふも前生に郭公ハ皆
　さう鵙ハ塩うる翁にて行りし郭公の皆を買て其かひさりしと仍て其かへる
　郭公の来る時分には蛙子の也で草の茎にさし置て郭公に行よ見えてまやまへといふ鵙
　なきと蛙子の也でさしてく草の茎し右の説諸抄にかく見えたり

同
けふくるよ世くのちきうをもろけくやかしこのさとの夕暗の頃
　所ハ菱原伏見の里の夕暗の此来世也近也との契りをせしを忘るなとし契りをせよとうけ伏見と以布臥縁侍る事
後納の歌とてとめる
恋の歌とてよめる

同
よしのの志つ中の市のむしる民のるえらなぶひにわたりなれてん
錺摩市ハ幡ア錺ア郡し

千載　かりしをりにしもそれの志るし家やいかゝ袖はしほりけん
要語にて袖の浦の事をいへるにて須磨のあたりの塩山の家にや
くわへたるへし

同　いふせんむろの八嶋にやくもかけしこひのけふりはたえぬなりけん
志のふる恋
歌恋の心をひとへ人にみせまし それともさたかにいひかたし それハいふせきを
おもひ侘てせめて思ひ出る也し下野の室の八嶋に煙を
立ならへて彼人にみせん也と 詞にいひ出かたき不忍恋の趣意也 此歌
千載集秀歌十首の中の一首也

同　かなひきや志ちのはしかき行めてもねもかゝし九（々）せんとは
法住寺殿の殿上の歌合に　臨期違約恋といふ心を
榻のはしかき京極(?)にありし九十九夜榻に九（々）て百夜にはきたらすと云ひ
しらぬ彼さりけていはれ（々）ハ臨期変約束の心也
法住寺殿にて五月の御供養の時かのことも歌ありと侍りけるに
契後隠恋といふ心をよめる

五月の御供養ハ院の最勝講の時の事にて最勝王經を講せら
るゝ事也 五月の御のうちも年中行事 歌合にもあり 法住寺ハ後白河院

同　ふみゝ(?)わすれの心ちせて云ふいつまてまんけんかとの草かくれ
下紐(?)オナ　春されは伯労の草くれみえすとも我ハ見やらん君かあたりは
歌林良材云 清輔奥義抄にハ鵙の居る草の茎をいふ 家隆ハ彼
草莖の跡にあたらし里にやとりてかくれる事をいへり 歌ハ見やらん君か
あたりをも恋の歌にて無名にのせ侍その侍に似たり 季吟云 此後成
[illegible]の歌も万葉の歌の跡をとりて彼在所を思ひやりてかくめ申し
草辺の居せをも云のかくれ隠ていつまてと詠ゆん志をしもいへるとの
也し契後隠りなるも居せ草かくる事をいりんとて云のかくよめる
謂ふ二条家の正風体なるへしと云云

同　つとめてよせてのちきりをもとめけくやかくこのさとの有明の月
所ハ菱原伏見の里の有明の時来世松来世近もとの契りをせしと忘るまとし契りをとゝとるけ伏見といふ所助縁侍るや
後朝の歌とてよめる
恋の歌とてよめる

同　よしのゝ志つの中の市にもいてし民のかえぬるよひにかりてまつんてん
餝磨市ハ播ノ餝ノ郡也

餝摩市 播ノ餝摩郡ノ市ハ物を交易(カウエキ)すれハ身をやくてもまし思て
のうしてとかくて絶ゆらひに身をくても去りかき事なるへし

同 あし山流いそうれぬ中のうきなあらハわうれ恋路にあにうされ候ん
百首歌めしける時恋の歌とて
深ゐなりし葦しかれこひちといはんとての序歌也上ハ古今の詞也

同 八重むくらさしこもりにしよもきふにいかてか秋のわけてきつらむ
百首歌奉りける時秋の歌とてよめる

同 夕されハ野への秋風身にしみてうつらなくなりふか草の里
百首歌奉りける時秋の歌とてよめる
京の川より南の方の事也なりあれの地に鶉とよみて年久しく風情
もう候事をきて後来此歌を身にもしたひけしと云はせてをおりあせ給
せしハあちの事とを

同 石はしる水のしらたまかすみえてきよたき川にすめる月かけ
百首の歌の中に月の歌とてよめる
保延年中崇徳院のころかひ身をくるしめ百首の歌をを奉りける時

虫の歌とてよめる
同 さりともとおもふこゝろも虫のねもよはりはてぬる秋のくれかな
前ちかに身をうらむる百首とハ世に述懐百首といへる是也
歌の心ハあさき詠ハ学文奉公なとに付て是非にまよひ身をも昇進に
かも望うしなかれとも其本意を遂る事もかれなりけれハさりともと思ふ
かうに年老ちからもよはりはてくるし事を暮秋の虫になそらへてよめるなるし

百首の歌めしける時氷の歌とてよめる
同 月さゆるこほりのうへにあられふり心くたくる玉川の里
月出て玉河も氷の上に霰のふるさまハ心もくたくるやうにあハれなる玉のやうなる所の風情
玉の歩かくる風情より心をもおもひをまとふ心あるへし

十首の歌人々によませ侍りける時花の歌とてよめる
同 みよし野の花のさかりとけふみれハこしのしらねに春風そ吹
歌のなかに注又此歌再出
此歌千載集の中の玄の玄なる歌十一首の中也と井蛙抄に見えたり

摂政右大臣の時の歌合に郭公の歌とて
同 過ぬるか夜半の寝覚のほとゝきす声ハ枕にある心地して

百首の歌奉りし時[illegible]月の[illegible]てよめる

旧
いつとてもかはらぬ[illegible]年月[illegible]のつれなる

法華経法師品　漸見湿土泥決定知近水

同
ひとつ[illegible]の井もいつ[illegible]水の[illegible]

法師品ハ受持読誦解説書写の五種の法師の自行化他とて[illegible]
[illegible]人[illegible]功徳の[illegible]事を説[illegible]品なり漸見ニ
湿土泥とハ人渇して高原を[illegible]て水で[illegible]ほ[illegible]て
水の[illegible]泥を[illegible]て決定水の[illegible]成仏の[illegible]を求
[illegible]阿含方等般若の[illegible]土にて[illegible]法華経に[illegible]てハ
[illegible]泥の水の[illegible]如成仏[illegible]
歌の[illegible]ハ乾燥土の水に[illegible]水の[illegible]を
成仏の[illegible]法華経[illegible]

勧発品の心をよめる

同
さ[illegible]文[illegible]の山の[illegible]のえ

勧発品ハ[illegible]文字にて心ハ釈尊の説法ハ厳王品

[illegible]東方より普賢菩薩[illegible]て妙法を
霊山へかけ[illegible]釈尊[illegible]又妙法[illegible]
よて法華の説法を[illegible]て聴[illegible]如来の滅後に此経を
[illegible]守護[illegible]陀羅尼[illegible]普賢菩薩
勧発品と云

歌の心ハ是仏の此経[illegible]普賢菩薩[illegible]
時彼宝威徳[illegible]霊山まての[illegible]宝蓮華[illegible]種々
の妓楽[illegible]具[illegible]文[illegible]此
品廿八軸の[illegible]法の[illegible]の[illegible]

嘉応二年

同
住吉の社の歌合[illegible]
[illegible]此歌合嘉応二年十月九日[illegible]五十七[illegible]昔[illegible]月の
[illegible]住吉の[illegible]の姫松[illegible]

[illegible]のちの度の[illegible]

同
[illegible]の社の歌合の[illegible]の歌合の時月の歌とてよめる

同
[illegible]川玉[illegible]の[illegible]秋の夜法月
[illegible]玉[illegible]貴[illegible]波[illegible]月[illegible]の[illegible]風情[illegible]

百首歌め[illegible]旅の歌

同
うき[illegible]の[illegible]波のてよる
旅ハ[illegible]の[illegible]波の[illegible]集[illegible]歌十一首の中[illegible]

家ニ百首の歌よミ侍りける時

（同）あはれなる野しまかさきのいほりかな露おく袖に浪もかけゝり

野島か崎ハ八雲抄ニハ近江方葉ニハ淡路のよし作り（淡路三云）井蛙抄ニ此歌千載玄旨の歌十一首の中也

みちふかりしかりける時も我家にはてさせまかりける時八条院

関白主とかりける時の沖にて竹遐年の友といふ心を講せら

れけるにてよめる

（同）くれ竹と云はこれのかれ并ハ千代にいくよのかけをみるらむ

摂政右大臣ニ侍りける時百首の歌読せ侍りけるに祝の歌五首よミ

中ニよミ侍りける

（同）百千度うらしまか子ハかへるともはこやの山ハときハなるへし

浦嶋の子か事万葉抄ニ委し雄略天皇廿二年ニ蓬莱ニいたりて

淳和天皇の天長二年ニ三百四十八年をへてかへりたる由童蒙抄ニ見えたり

百千度かへるとハ際限なき事なりはこやの山ハ色もかはらしとし浦嶋ハ

仰て若きを祝ひきこえれハ白髪なりし是ハこれハかへらんとし

山家月といふ事をよミ侍りける

（同）すみわひて身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月哉

伊勢ニ何似ぬ今ハ侍らと山里ニ身をかくすへき岩のかめてん此詞を

用ひて夕陽月ハ余りあかれと賞したれ身を隠さん山里ニハ余り

恍ニかりつれ月卿とそきこえかるへし

二条院の御時四代まて侍ふ事をおもひてよミ侍りける

（同）いかなれハ昔の雲にかゝりて代々の雲井の月をみるらむ

侍臣とハ殿上人也七十五代崇徳院より近衛院後白河院二条院と

四代侍りて終ニ上達部になりし也　歌の心ハ明し代々ニ四代

なかくてとハいふへきをよく只代々といふニ四代の心あれハなるへし

遁世のゝち花の歌とてよめる

（同）雲のうへ乃春こそさらにわすられね花ハかすにもおもひいてしを

遁世せしと朝ニ近くまかりし後徒林の花の真実ハ春捨世ての花ても

わすられますハとよし花ハ数にもおもひ出もしきて余の言われ

此るとよし

花歌ニ法成寺ニまいりて金堂の中の花のちるをみて読侍る

（同）あかなくにむかしをしらハさくら花ちりのをとてもうつれとハいまよ

法成寺ハ後一条院の御時道長公建立堂舎地跡ニ参 近衛の北京極東云云

俊成卿ハ道長公より五代の末流なれハ歴の末ても何かれとハことに

おもひまいらするも堂舎を始めまつりし先祖の御堂の荒廃されハ何事

も一入あはれ深くも哀と見しとの心なるへし

同 うき夢ハなこりまてこそかなしけれこの世のちも猶やなけきん

述懐百首の歌の中に夢の歌とてよめる

後白河院の御時五節の比定家朝臣誤りありて殿上の籍をけつられて侍りける其年もくれにけれハ又の年の弥

生の朔日比に後白河院に申(後白河院に申しけるとて)かんかへ侍りけるとき左少弁定長卿に

よせ侍りける

同 あしたつの雲路まよひし年くれて霞をさへやへたてはつへき

定家卿殿上を除かれて芦田鶴の雲路まよひしと読なして猶

年くれて又ある春も猶殿上をさへへたてはつへきやとの歎きの

心を雲路の縁に霞をさへやと読なして

述懐百首の歌よミ侍りける時鹿の歌とてよめる

同 世の中よ道こそなけれおもひいる山の奥にも鹿そなくなる

古今云道こそなけれとハ世のうき事をいひとりて今ハと思ひ入山の奥に鹿の物

かなしくなくを聞ては山の奥にも世のうき事ハのかれかたきと思ひ捨て世の

中よのかれ所なきを道こそなけれとよみ給ひし此集撰ひ時ハなを道こそなけれと

ある所に俗縁ありてハと斟酌ありしを別勅にて入られ名誉也と云云

崇徳院に百首の歌奉りける時落葉の歌とてよめる

同 まれにくる夜半の松やふとゝハせてめくるぬしられや峰の紫あるらん

千鳥とてよめる

同 すまの関ありあけの空になく千鳥かたふく月ハなれもかなしき

摂政右大臣の時家の歌合に恋の歌とてよめる

同 あふとハ身をすてゝもとおもひしをかたさはしてやさんかなしき

歌の心ハ此世にてあはすハ来世にて来世の契と身をすてゝあらましかハなと

読なれとその世まてたのミかたさよのかなしさよとによしとし

同 春の夜ハ軒端の梅をもる月の光もかほる心ちこそすれ

題しらす

風情優美なる歌なるへし誠に二条家の正風体し

十首の歌人ともに世にある時其の歌とてとゞめ侍る
こちしのゝ心のさまをもふくまれはこゝの哀をかねてなる哀をなく
定家のよく心見へたり公家入し頓阿の井蛙抄ニ千載集の中玄の玄なる歌十首の中にし
此首を出せり

新古今
中々に絶ぬ思ひのよるもなかりきあさつゆとやこ(?)けの志ろたへはつらむ
定家朝臣母身まかりて後秋比墓所ちかき堂にとまりて詠侍る
帰るまではてはたた松風を我七者のはしんは哀しかれ涼き鏡し

竹遐年友
いくちよしかはらぬ色の呉竹や君かちとせはいのよはひなるらん　俊成卿
此歌ハ後白河院みこにおはしましける時右衛門督殿にて[illegible]
て竹遐年友と云ふ題を講ぜられける時の歌也　御製并人々の歌彼集に有り

玉葉
どれくへし井手の下帯行めくりあふせうれしき玉川の水
井手の下帯とハむかしをとこ人山城の井手にてめのわらはのいとうつくしきを見て後
新古今　哀傷
ちるとみし人七(?)の其志るしハ[illegible]ふて帯をとりて[illegible]る故事也
ちるとみしよ志のかたみ(?)のかたにても家かく悲しき袖のうへかは

△定家卿歌集
守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに
春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるゝ横雲の空
大空は梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月
百首歌奉りし時
梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ
守覚法親王五十首歌に
霜まよふ空にしほれしかりかねのかへるつはさに春雨そふる
百首歌奉りし時
しら雲の春はかさねて立田山をくらの峰に花にほふらし
千五百番歌合に
さくら色の庭の春風あともなしとはゞぞ人の雪とだに見ん
五月雨
玉鉾のみちゆく人のことつてもたえてほとふるさみたれの空

五十首歌奉りし時

さゝられの月ハ清見かあれこそたゝりおそろしもいつわりときゝなふ

守覚法親王五十首歌読せ侍りける時

夕くれハいつれの雲のなこりとて花たちはなに風の吹らん

久かたの中なる川のうかひ舟いかにちきりてやみをまつらん

西行すゝめて百首歌よませ侍りけるに

見わたせハ花も紅葉もなかりけりうらのとまやの秋の夕暮

さむしろや待よの秋の風ふけて月をかたしくうちのはしひめ

千五百番歌合に

秋とたにわすれんと思ふ月かけをさもあやにくにうつころもかな

（和讒ふと古文せんくこあれし）

百首歌奉りし時

ひとりぬる山とりのおのしたりおに霜おきまよふ床の月かけ

時わかぬ波さへいろにいつみ川はゝその杜にあらしふくらし

百首歌奉りし時

駒とめて袖うちはらふかけもなしさののわたりの雪の夕暮

摂政太政大臣大納言に侍りける時　山家雪といふ事を読せ侍りけるに

待人のふもとの道ハたえぬらん軒はの杉に雪おもるなり

千五百番歌合に

かへるさのものとや人のなかむらん待よなからの有明の月

母の身まかりにける秋野分しける日もと住侍りける所にまかりて

家の旧跡へかへり歎くといふ事也

玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人こふるやとの秋風

詠しくと

忘るなよやとるたもとハかはるともかたみにしほる夜半の月かけ

こととへよおもひおきつの浜ちとりなく〳〵いてしあとの月かけ

摂政家歌合に　羇中晩嵐といふ事を

いつくにかこよひハ宿をかり衣日も夕くれの峰の嵐に

旅の歌とてよめる

旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし

摂政家歌合に　秋旅といふ事を

忘れなんまつとなつけそ中々にいなはの山の峰の秋風

再会定めなき別れハ中々に待と告なと也　行平の立別れの歌に問答して詠し

新歌にてかのことも旅の歌になりける
袖にかけきるいぎりし〇の菊もらしかゆかころかたに海なせ
詩を歌に合せ侍りしに　山路秋行といふ事を
ことこふも今やこ滝もてられ涼なりかりもえるに涼さの下に
おひし那須野のもかえ火らてならぬてなかりハなならにゐりふしも
摂政家百首歌合に
海辺恋といふことを
さ由の浦の袖になみこそおかる路の家りとハそれともふも涌るそ
冬恋
庭の霜おかく涼こおりきえけひなむそしもそらぬいしのなさらふ
題不知
西行人になり百首歌読侍りけるに
ごうしも人ないのちきりハそ川せなりかの人涼ろ〇の涼の世に皇
わちわすく涼きおかし涼声もけしおとせふかれかゆらかるひん
恋の歌とてよめる

加ゝ海さのやまかへゆきのおなりもろんけしも川辺なかる涼み明の月
松山とちぎりしいとハ涼しなくて袖こそなかるたのころ月歟
摂政家百首歌合に
いつわれとハ家わかし袖のやこたかるゝむ秋な涙と涙とこの君のさむる
きえ侘ぬらん川るふしとの秋の色に身をこうかし涙なりの苦しさ家
いせやもまれぬ那しふらいやまてきのこゝろなるおこしも八
まつ〇こゝろの涼しききのわくの海よしわかいのろこのいふひもかな
白妙の袖のわかれに涼落ちて身にしむ色の秋風ぞふく
水無瀬恋十五首歌合に
題しらず
うきみりしその黒かみのもとしにうちふかふ中とハおりのまよふ川
近浦にて年久しなりて後よ人の男とも大国の
前まいりたりけるに
有明にて三條院にの浦の妹がゆく身ゆきもあはれなり
新歌不歌合に　海辺月といふことを

藻しほ汲袖の月かけおのつからよそにあかさぬ須まの海人

後白河院栖霞寺におはしましける時駒引のひきわけの

使にて給はりけるに

さかの山千世のふるみち跡とめて又つゆわけし望月の駒

守覚法親王五十首よませ侍りけるに　閑居の心を

わくらはにとはれし人もむかしにてそれより庭の跡は絶にき

わくらはとハ邂逅とかきてまれにといふ心めつらし又一説わくらはとハ

病葉とかく夏の比青葉の中にあかく色付たる葉の事也

最勝四天王院障子に　大淀かきたる所に

大淀の浦にかりほすみるめたに霞にたえてかへるかりかね

題不知

君か代にあはすハなにを玉のをのなかくとまてハおしまれし身を

摂政太政大臣大将に侍りける時勅使にて太神宮にまうてゝよみ侍る

時外宮にて

ちきりありてけふ宮川のゆふかつらなかき世まてもかけてたのまん

右四十六首新古今集に

六百番歌合

霞かゝるとかさの山もこえもせてこそはさかハおくる日のかけ

伊呂波四十八首の歌

星はうたかしにめくりもかはりてはてなきかんとを承の秋の空

家隆集に　禁中百官の座て衆星の宇に位をなすにとりて星の位と云し

思はれハ星のくらゐにわかれて雲井はるかにいつる婦人（ヲトメコ）

さくらハこの世にうきこゝろ法によるしもくるし苦のやの里

神風ハ伊勢に限り外にハよまぬ事也

わひて見え二見のうらにこゝろまて神かきとられ夜の秋の月

新後撰

なかめいてしふ海さかのあさきり秋しのゝめくる嵐にまて

夫木

この日ころ雪を待ちの森に雲こもりてかつきこゆ霜くれのまくれ

建久七年百首

ぬれしよハ○とく雲とあやめしらん子の峠の山かけの夕やみさくらも

喜多院親王家百首

山深み月もさしいてぬそうさ○なし雲のかけさそふれの岩

八条の歌

うかひの雲のうきなかれとて釣せぬさかれぬ加へ家人

家集

わけ入はいふかたとも印もあれて雲しく谷にうくひす黄鳥

洞院摂政家百首

桜咲く雲のかかる谷をうちくらしつつやこよひ月にいつれ

夫木

ころもてに汀の深こもうちそよかれ蛙なくなし雨の下も

つらのなき葉をころもにかくしぬるかもころもはかりと云也

建長七年百首

かぎろひのめるころやの○深くて一夜の草に流れてくるの火

千五百番歌合に

四方の海もかすみにみれはあめふるし冬しきちちにこゑそさかなん

続古今

あれてうるほひかろのゆきのえにかかりうきうけて月いつくら

家集

夕暮く日本の流かをもえけしのなくや雲みの○のうきに

建長元百首

こよひ桜てありしもなきかんこれを山岸深し咲岸のうち浪

内大臣家百首

うかふのこけうなくやえんかとくきれく雨さうゆくし深岸のきをうく

きくうなやえんといふかきけせてあしらえんさかう○さそく色う郭公

うきうひくらしく雨さう山は桜深くなし

家集

いかうさしてゆくりうう○深ゆみのこをきえて深まなくさるさ

玉葉

さか里の雲のかくめにくまなかくむやとろう○深き花の夜のわく

夫木

谷ふかくかよふ絶なし笛の○渡るとも人もなしての○の白雲
家集
小野山やまきこる人のかよふさへ谷はわかれたる人もなし花
夫木
天はるかにわたるなるの山のあらしにたちかへるかくるに花のさくらいさくらかな
（云はしハ宮殿ふ至る路しるし日さしはしハ或説ニ天子ハ聖日とし日ふさくへよるし宮殿ニ作りて内ふ天子の中ふまはしうる日さしはすへて中ふ作るよし云云）
百首
旅人のいくらし越ぬ思へなんかの日あしのかけはしやくと
左大将家三十首
峯のの水かよふきのゆふしい誰とよこなるきはなれの山河
類聚
おもてなよあらハ谷を見るとは向してこのそいの杜の志めなハ
（今よりにはるかに）
越後秋豊
雲をわかれハ谷ふせし夜を天の河ぶ渡りけ手渡家の○のちなし
（玉橋）
建保三年五十首
行ともあれ山路のさくらあらたへてこ雲も深き谷のかけ橋
夫木
夕暮の雲はそくしわたるハ谷河にかし本のうへのさるへあまり
（かきの橋ハ木のうへよりわたて橋となりたし）
家集
いかなれハ手よふのちるふあきられてわたしふをいのちの○の月影
文治三年百首
こえ渡の浪ふ越る湊渡石のうへ渡して後も三年をなかつ
家集
あま雲のこみ渡りとのいふさし久しくのころ秋の志ろ草
まつうつろひきこえ浪のかけの猪ともひのつゆハなのもあし
あとのこかつる山流ふ寄きこえて秋風もこ松るられの岩がみ
洞院摂政家百首
こほりゐてかき中川の常えしもかよひし鳴渡あともしらみ
（イこも）
類聚
里近の苗代水にせきかけて流れくゆく川渡とまでゆつ影
家集

たつた川やせせの波はちるの色ハ錦しく紅葉のかたとみるかな
夫木
たちかへりこそ行の池にあらはれてこがねのきしにあそふをしとり
今の歌ハ極楽をいふ
かの国のうらにうき世の歌をとかれてや知るはな葉は常はい
建仁二年五十首
人しれず行し山に月のかけみえて入江は波にあれる葉を錦く
類聚
秋の水きよきに河の中に日かけ水の底もさめとみえるハ
家集
わきくる岩浪の音かなにあれをきそひてもちふにあらねの川越
国ともめる民のかくは知らえて雲井の雨まよふとも炭の函
一字百首
たちかへりの文は行てあるいくるの名は雲はれまほしん
夫木か　故郷

郡ともれ志の人とる大行くきれかゝしさぬ今もうかゝむ
同集
あきしハのとくこの郡うこときあしらにいのさ稀かあり治[始]めて
いうにのとくこの郡ハ日本国中の郡をさして云
同集
里ゆかふ大のこゝろやもとまた年もうかくは いしとの家ねハ
家集
このさとのひといのむくの垣をとうしけふ日ぐれをむ涙玉の七御
夫木
谷越は眞柴は行きのすぶ分ちりを流めハくる行もかうや
伊呂波四十七首
きいのあしを法にきもあきちうしいかゝも寺も山かくして
家集　宋中務
中の言とてなのこりのいひもあらしこやまなさとの古きわかれは
夫木

さこりこえぬ山路にまくらとこころひもうとし志かる雲 法印

あらしふく杉の葉のいろまで高やはるかなこゝろとある

十題百首

秋津洲かさね浦門法のときさひ流す小法師 あきのりき

文治三年十首

かり流れゆくの高れあと絶てゆくぬ窓はとふる影もなし

夫木

苔むす窓の庵法ひとし宿とふにきくやあはてうき世を

家集

ちりさくはこのをひきてよ秋の月苔法岩や小世はをひくとも

こゝろのこゑやうゐの草庵かゝる枝かへの窓に秋あるあるらん

六百番歌合

くせけろ杉の志ゝ草よう志ほりもしくかわにくつちの岩

玉葉集

た秋とゆきけの葉の芝生うちなびきたにけ竹むくもの久くれ

家集

あかねの宮はいくとせろやえんおきふしのちの乃ちのきそのうけ

宮の御苔の杉の枝中うつ宮けふくるる妙経法けつ草

苔の杉は苔の志みつちぬ杉本にこそこし庵にもあり

老若五十首歌合

あ白妙や下のえけるおもひ草きのめくらび流るふゆひ御

家集

冬来ては玉とまかせよひ玉 笹法紫に法宮のこてまかせ匠

鄰歌百首

色くる青紫法竹法うきかしふこえ紀ろ寄や竹はに世の中

十題百首

志のあはこゝちのかくふるふるのそのえはうるやいとに紀わく

うきをうはもとよかりこはうよあとまれ宗に杉ゝて御庭

来向の岩はの志かけくれかへてむしろ法竹よびきそ○でそろ

洞院摂政家百首

三輪の山五月はれまの杉むらに梢たかきの声もたえなん

六百番歌合

思ひあはゝ昔の塚はふる人の塚てゆくのちきりは猶くちやせてなん

六百番判云史記にいはく晋の文公か私の妻にかたりていはく我死なん
ならんとし廿五年まてまつへしとのたまひしを其時塚てせよといひけれは妻のいはく
廿五年の後ならハ我塚の上に栢の生なんといひける事をそ見えたり
めし其事をいへるにやと云云

十題百首

冬されハさむき梢にあつまりてかへるへし岸辺はしさの片枝 槻し

鳥かちて沢辺にかへるなきさのたてもあれのひとつきなりけり

四季百首

うちわたし神なひ川のせゝにこそ堂のつはさハ我川のすゑ

十題百首

おもひやる田面の鴨に我もまたかへらぬなれのひは萑か鳥

さしもなきにたちまよふ草の葉の先をちらふに庭たゝきか鳥

庭たゝきハ鳥の名也

夫木

ほしあへむかりの行ちふる川塵のかきをへあはれなる小車

家集 詩経云陟彼高岡我馬玄黄ト云云

黒かりし駒の毛はかは山中てのひとつむ岑のいさなりし

山里ハいとゝかなしき住かともなき人しもあるはこゝろかなして

十題百首

家をいてし我の毛のいろにしつむ月のうつりけるかな

文治二年百首

さしのほる波路の雲は晴まなきいかてもいく世しつめるかな

六百番歌合

かくれてもなき世の色をひとつくさすのもとひにかよふかなしけ

此歌ハ類ハ結の…

千五百番歌合

さそくのさきにうきしかなふそ忘れかたきハのうけハこえゆん

天照太神岩戸にこもりましゝ時八百万の神たち榊の上つ枝

かハ玉をかけ中つ枝かハ鏡をかけ下つ枝かハ幣をかけて神楽を奏し
ありし事也

家集

捨人法師やまとのくにへやりけるをうけるものにとかへしといふむ

續古今

忘れめやとしのみちの新枕さゝむそうの月日ありとも

令式三云夫没レ落外蕃ニ有レ子三年無キハ子二年ニシテ聴ルス改嫁ヲ云云

六百番歌合

古へにいてしふ倒さるなきらぬわかれしの倒ぐゝる袖につゝみて

夫木

君かりにせしのそころもかけてけり秋のよ倒ゝる月のさむしろ

類題

むかしけりきこりよ馴の琴のかくハ袖に知るまて袖ぬれもかし

六百番歌合

大和琴化して袖に女となれる故事也

笛竹のうきふしてもちさうとてかくのうかうさひ猶せとや心か

新後拾遺

堀江漕るとこの小舟の行なるに心かもし春ても志るふとけりる那

長尾社歌合

手向してなやまうしちはやふる長尾の神法爾の世かりして

六百番歌合

一夜うと登上のさのの前偈ゝりむもひとてうひとの契うさ

登がこの里ハ美濃なる偈偈とよめる名所也拄女ハ水辺に行きてよむ偈偈ハ名ふ行て出し近江の鏡山登路美濃の行てハかの里尾張のかやはの系なとこ那偈偈の名所也

類題

山なかれあかれころの男しのてのまこのこん倒しく倒ふに思法こちか那

玉葉

玉志ぬも高弟にをハなあかれしてあころとゝさしき世にそよかなし

涼かのまもわとれんすのかいてかての月はさかりし袖法にかわえ

禁裏表御會に　行路柳といふ題にて

これや人の誰家の柳なえ枝て行人をかへりみのなかりけるや

此歌不吉なりとて勅勘ありしとも

拾遺　古寺残月といふをよめる

山あらし家寺のかねのをとちはのいくたびかわするゝことをしらん

同　隔遠路恋

行きつゝもやへくらしふかしけるのみちくとくあはれ中の通路

同　翠柳誰家

うちなびき春の中にや　これなるん外面清柳ねくらは知らせと

夫木

虫明迫門備前也

宮こふていかにてむしの明のせとの入江清中の人もえしをと

同

庭の面は鹿清姉ともに行れきてとかうにかくし竹行めかうし

百首

世の中にむすびと行人のさるてみ行くへはなかりしくこの家に論しをもなし

海士の海に入時うしろまて入しいせのかたゆゑにはいゆの

さててハ人を咒咀をなしてなとなり

新勅

名もしらぬ猫のおほしも音なる山さくらどのゆきかへのゆふ

都とかのうちにけふ名はうしの市やいさかしき知らぬなりとての家

百首

庭のおもは鹿のふしとこいなとていかなるかたに竹あめれのし

佛名の歌に

河竹のあはれく家ちかうきらしくされて三世の仏と中の御名ときくに

河竹とは禁裏庭の川端にうえられたる竹のことをいふとなん

くるゝにうちかくへ文も月見てゆかれは志らのともえらまきあれ

志ミハ蟬（シミ）蠹（シミ）白魚　和名云食書虫名也云云

おさなきゆくこのそくれに一つなるか御しあてしく

好子ハ源氏物語をなして好こ友をしてきてなく口云云

くらくてこなをなるなきものなりしさけしひ行さるかもの名なるる

なさけハ求し

秋の歌とてよめる

千載
志くれ行ものこも忍のいろなるもかれハ中々人のかハるなりけり

為任法師人々にすゝめて百首の歌よませ侍りける時時雨の
歌とてよめる

同
志くれつるまやの軒端のほとなきにやかてさし入る月のかけかな

まやハあつま屋也雨かゝるのきのまふるそ屋し軒のせはきれてさて
あれとふ又白中ふ門ハ志とゝの中なるそてかけさゝる光の影と
なくとある

殷富門院にて人々百首の歌読侍りける時月の歌とてよめる

同
いかにせんさてうき世ハなくさまてのこしは月も泪かちなり

為任法師すゝめ侍りける百首の歌の中に苗の歌とてよめる

同
いつかしら野沢も世沢もうつくしきものおもひにちなりけり

百首歌の中に述懐の歌とてよめる

同
その後からあれハいかなる世なりとておもひしく人のなきへきかな

百首歌よみ侍りける時別の心を

同
わすれてもこゝろに別れまし衣いくへかさなる中の緒なりとも

[illegible]しらすそ

同
志くらハちきりし中もかハりぬるこの世にひとひのこる名なる

志くるハかハる程ふてありての心しさるふかく契りし中もかハりぬる極
世なりとも人てあるふもわらふ筆のあるをまさとそなる

寂蓮追悼の歌　定家卿

玉きえる世のことはりも志らてかな人ハ待らし便ちしの末

右百人一首拾穂抄にえらひ玉きはるハ両用なり一説魂極とし
命の終りをいふ一説玉極ハ珠玉をもちふめてかれる事也と云云

続古今
小倉山荘の心を

露ふかき霧や都の中に家ありてかさすも袖の花なからへきかな

風雅集　又

思ふらんか心ハならし永小倉山中の軒端の花よあれてさきさき

大井川ハやきぬ升せしその里とさく衣かたかつきたなしとも

新續古

この程や朝きの千鳥なかれいる川へかけて夜ふかくの声すみ 同　定家卿

建保三年詩哥合

冬風の雪きえぬやいはこほりの色になほ古のすへひとつ見つゝ路 同

夫木

雲の波かゝりは見えぬ沖津浪に[illegible]川かはかつさしくかは 同

家集

山さとはいひしものかは人流れともあらし右の風犬の声をもらして 同

一説　とのゝしるさといふのさうて浪おしき人さへあかしく山の浮かふへきとも あり

いかのさうていふ蛍の海に入時かくのをそねて人し伊勢物語見於

あるのさうてとは人を兜咀するとそいふと云

夫木

雲の波こえし川のふきのおきの[illegible]川かはかたしこそえぬらぬ 同

あかしかはといふ名あるへしと分類にえ

[illegible]川のみも今ももえてしかも青ふうしあくのやこふ行てこえたらむ 同

[illegible]川のほとり龍馬し一日千里の[illegible]

家隆卿歌集

百首歌よみし時

谷川の流れいつもあきにも声をたてかはらひなき流へぬるのちとり

堀河院百首歌合に　春曙といふ事を

かはらいに川を来の千すくしかのことあさみにあかしきとこの雲の海

百首歌よみし時

梅かゝにひとしきえいはえ風流にてくえをかけそ思てふらかはのみ

堀河院百首歌合に　野亭の心を

かすかにとちさることもわかれもえ那の中とりせ哉ゝのみかひを

守覚法親王に五十首歌よませ侍りし時

このほとりは志賀も知らぬも玉かこ流かれふかれてはえ那の香かを風

五十首歌よませし時

さくらえ那をかぬらうなかれ流水たえて清き流のこるかのそふか

もしほ川きしの山かれさきふかし・ゝをのさくらはちりたちておくらん

紅しそを

いふせんこゝよりまさるこのかたくきこえ侍るとかや人ハむかしの名のゆへ
こと〳〵くさかへ嘆(?)をむ海うちたる路のいりてむかしの香ありかほかん

百首歌よミ侍る中に

きのふたにとはんとおもひし津の国のいくたのもりに秋ハきにけり

守覚法親王五十首歌讀せ侍りける時

うきねする衣手さむしもろかやゆふしみのさとのかりほのいなつま
有明の月まつやとの袖のうへに人たのめなるよひのいなつま

和歌所の歌合に　湖辺月と云事を

にほのうみや月のひかりのうつろへハ浪の花にも秋ハ見えけり

題しらす

あかつきのおもかけさひし久方の月のみやこのかきねのさと

和歌所歌合に　海辺月

秋の夜の月やをしまのあまのはらあけかたちかき沖のつりふね

夕鹿

下もみちかつちる山の夕しくれぬれてやひとり鹿のなくらむ

守覚法親王家五十首歌中に

むしのねもなかき夜あかぬふるさとになほおもひそふまつかせそふく

千五百番歌合に

霜しらきなのみちよりけの志てこそしもかくんあはれのこゑ

冬月

なかめつゝいくたひ袖にくもるらむしくれにふくる有明の月

湖上冬月

志賀のうらやとをさかりゆく波まよりこほりていつる有明の月

旅の歌

野辺の露うらハの波をかこちても行末も知らぬ袖の月かけ

五十首歌奉りし時

あけハ又こゆへき山のみねなれや空行月のすゑのしら雲
ふるさとにきゝしあらしの声もにすわすれね人をさやの中山
ちきりてもひとりハあらぬ清見かたなみにかよふ行舟やさきの塩

千五百番歌合に

故郷にはあらねどもとまりの中川ゆかんとてにあるやこひしかるらむ

旅歌

まくら宿とる草枕ハ中々すがらの月し笑とハきくも旅人もなし

恋の心を

冨士の○にたなびくも猶なびきてものおもふ人なれものハおもひありけり

けふの身よ今ハこゝろのかはりともなれしそのよの行かへり明ぬ月

ふりすてハ○につれなき恋ぢたえし名残のくすことも

千五百番歌合に

おもひ出よたが○ことの末ならんきのふの雲のあとの山かぜ

和歌所歌合に　深山暁といふことを

さても猶とはれぬ秋の夜半の雲ふかく月も○に見ゆらむ

影しるきと

あきの雨袖にハかゝるとも上の空にみえしのひむすぶ

おもひ入身ハ草のあれのおもひを待や来ぬらんの月

百首歌奉りしに

あはれとてとはぬもなく明ぬたびの草枕つゆわくる

最勝四天王院の障子にあふさか川書たる所に

君が代にあふさか川のうけれ共こゝろのまゝにたえぬ流かな

海辺霞といふ心を

見わたせば浪のうらもかすみつゝなみのまに山のはの

百首歌奉りし時

海のはて中川の行かへりもあはれぬ遠ハうらぬかたの中あハこせなり

西行法師百首歌すゝめてよませ侍りけるに

いはゆる昔のことにふかくこそいね山路の月や見る庭の

影しるきと

あはれこの行れの袖見のあらればも玉ぬきていのちありおもふとて

和歌の浦や宮川堤おもひに深山派行ハ霞身のよる人ならせよ

その夜ことにきゝぬる月も秋の身もそむきてにはなこそあれ流く

春日社歌合に　松風といふことを

かはらぬ谷ふかきくちなれども君にゆきこゝろ○の中なりせ

右新古今

家隆集ニ

けふよりの秋にハあらし笠置の山のはの朝日ハ

鴻が路のゆくへの空にわたるなれや汀の田露も下葉かれゆく

夫木

きりくす庭ならしかれのをはなかたに声かれかれに君はなきつる

家集

かり庵の床もさむくふす路もさひしき秋にいくよ旅ねあらんむさし野まて

ゆふへ行く雲の床ひとりをきてんかハの浪よりさひしきあらしとも

みえけれハ○の笠やも物さひて雲のゆくえをそへにけるかなし

あつま路やまかせのひゞ八重山雲ゐにそなひける

八重山ハ相模の名所されともなきさ山にもよむへきか

志らせひやふもとの中川の水ふかれきかひ那そへそ峯のこすらし

松ハ陽木也へ娼ある物也

ころもこしの中川のいはかねの波涛をうけなさへかくて中に志かまと清く

中川の水のしかきりも行るものにしかねにつ行さすえて年の色ふり

秋立て中川中にわかれよ妹くるの中てさひしき荻のそよう那

みの○やたえも今ふかれ行かくし行ゆきさみ音清なけれ日なし

あめきりハ天の音かのでと立て暮くうちよあるてふ行ゆきさみ家も同し

秋ひとの床をやよもいつミ川かもとまありこそなかハあかく秋

志ら雲の袖もかきて山川のみかの谷ハいさりやハさえ

日本イ

寛喜女御入内屏風

ゆふちかの谷こそめ清ぬ○の鶯のなきかこひていまぐさねのこえ

夫木

衣ひらさ○志かつをゆかうまさきゆかたこえ駒の行とやしる見え

志かつハ塩津とし志かつのうらしをちふハ也なし

あふことのひ中川清古木清いつくふ谷のてふふくちのこをくむ

かくれのいまかのわすふをむすてても行くとあすらと世のやおけん

新勅撰

かすひの○あすのしほハ出さこ中の白さなの新羅の望清もこゆめし

かりいつ風いもの袖のやこほるらむあれし沖津の志賀の濱路

志賀の濱ハ筑前にあり

家集

音羽川行きかひし雲は関戸とりけむやたるのこけるあらん

夫木

ふるさとの祝のいさめもけふもなしうき世は関もいてゝこの身や

家集

ころ津にこそ浪ハこえね清見潟関守なみもふちくるとも

建保三年名所百首

清見かたこゝろは浪に清き川あるこの関戸に行く風はけ

夫木　岩瀬杜山城也

いそかたのめは志ら水かけてかはるやひとのをとむ行べき

家集に

谷川はちりもはまたのりに知るまさるこちやとこえなん

沢田川せゝの浪ぎにし中えてかけみをけふ風吹の行くへの

夫木

興こぞりさゝきめ見てこの川はむかしの岸辺に若菜摘らん

あまたもあるもこえぬ夕の白浪このわけていやましも

百首

山さとハ春雨の小田は苗代にかきせの水ひかる波てそこ

家集

うへ風さのこゝろにうふさに降て谷の沢田ひし一人たちゐる

君さ待つ汀のくらまにゆきしかれ中にあきし海にちとりのなく

あれ日の行くのこぐあはうちえへてちよ浪のうきにかはるらん

うく縄清濁あり濁るハさゞら縄にて清ハ縄を火にてもあるの

あまたれあとさあり千尋海ハ紀伊の名所又海の熱谷也

さゝ波や志賀のあらいとちるきなところめ渚にけふ浪むなり

八百日行く浜のまさごも波きなへし忘らちハひさ流ふかくなりなん

中にゆくしらかへ後もかきなく人はなのそなり袖にまさるらく

ゆくくるの年もかさなれし岩つなびとむ瀬法古声し

宝字二年百首

春もなほ川氷えてまつ年し瀬の上てふこなれなかるらし

志がらきの槙のそま川こなりしてうけもなかれなき流れ九月

滋賀(カラキ)ノ杣ハ近江也

家集

うきひとの世をいつはりもれ水を渡やみつせの河となるらむ

みつせ川ハ冥途黄泉也 又云三途川に浅水瀬(センスイライ)あり橋渡(キヤウト)あり強深(キヤウジン)瀬(ライ)ありこの故にみつせ川と云也 強深瀬の岸に衣領樹(イリヨウジユ)といふ木あり其樹下に懸衣嫗(ケンイヲウ)と云鬼あり是を三途川の嫗と云也 罪人の衣をはぎとりて衣領樹に懸(カク)と云 右十王経に委し

地獄のうきをわすれもせてみつせ川のほとりにもかかりなかく衣をぬぎてかけなん 秋生第九二

篁京道雅公女

衣に竿にかかるに三途川のハ水竿(ミサヲ)もあらなく行かな衣をぬかるなとし

きこれハはるびこゆいつつ川こなみこえと書きてかくまれ

柏山山城名所こ高の山とも

その名さへみなくれはなね久瀬てかの沖へ流を瀬乃加茂の条に

年ふりの入江の舟の舟にお升ハう流つめこち流うけて流るる

なほい河こなハさかれ中く水流袖の流こもせきやらなむ 袖ぞ流る

こなハ水の流し こなハさかれハ水の流のつぶさなくしなからあせく

袖を堤なくよくて沫し

宝治二年百首

なこり村ハ升もののうき草なきよきてしのゝ人のあたらふつり川なくなる

升ものハ家て堤也

洞院摂政家百首

いく千代のあたをハかもさく竹流ながらちぎりのいろハかはらし

さゝ竹ハ大みや人なとてるる梅紹也

十題百首

ちよ川代をまもしく庭のさ川のうけそるの日影ものとかなてさかり

百ぞ

とふに見しかれ木も橋の行へもなし かはらの宿のゆきの夕暮

かはらの名大和也

家集に　水郷春望

さほ姫の朝きのそてや匂ふらし かすみも白き宇治法川なみ

同　水郷夜雪

あしろきに志かつ雪ふりて流れぬる中ハ駒流行へや絶ぬる

塩津菅浦共に近江也

續千載に　水郷紅葉

さほ川きしのもみちのちりぬるハ みとふ水にも行ぬのいろもみえぬ

家集に　水郷秋夕

せふえ川ほうもみちのかけきそてちり行きのあきやくれゆくらむ

同　水郷寒芦

大井川入江のあしの葉かれに 独こぎもさむ中川のいろ哉

同

流くハ中にて中川のさとふる川なみうちもしきしきの夕くれ

夫木

淀川法入江のきしの中なれは 清みく水に ふるさむ里の子

家集に　山家

さみしさは 軒人ぬ中の中かふ行くるあるもの玉やをとらん

同　閑居

山ふかみ川のこかけもうつすなし 月をさし入宮流かくつらに

庭の苔座のさむ(し)袖その川くいらとくの中んいとにちくらん

同　宗居悲

流るくとおかむ風中のさらくえ来 行みくて流くきさ雨のおとゝ

同　窓中燈

同

せんかたいせのこ雨やのあはれの来し窓うつ川雨の行ゝくき流声

ちりの山行れ多くちぬいかもうきその志のやのをとしゝ風くむ

杉板のてかゆ風板らもかれと見えよ行ハぬちゝそを雨もふ雨ゝ孫

百首

きこえんとよりてなけかなしきけれともゆく三輪の市こよひあり

市とよむハ市人のさわく音のきこゆるよし

家集

さひしさハいくかもなかりけり松のやとの庭のあけ保の

くれの寒しもこほれる夜に落葉きえてなか川の露に吹

薫あらし庭清かくたちの露ちりて猶やめらのきえをもらすな

新勅撰

かすみ○なかむれハ又中に日さしの紅葉の影の中川もうらめし

建保五年歌合に

こゑたてしとおもへハ月中川の門まさてん昔めの紅葉の中になかれ

家集に

岩や戸にきこえ行君の中川と世をへて いく世経ぬらむ

かけの庭えたる岩やのなかれにかよふ人ハなしくやすらむ

中なかに帆し 昔の楫もこちきて いそうらなみなる月夜帆

めくりゆく野辺の松もうちなひき民の草葉に落る露をかく

志らかよふ人のことまうちよるひまにゆくかけのうけひきよる清く

神なる行水とよふ人の水とすみ其水に生る水草なへし

朝影く夕方の水草君なれてあかぬ心のに清のいさよし

あやしの庭玉藻の流る君と池て見るもさかりのきの袖

千鳥なく河辺のちりくる露さえて行ハてを久隔冬の夜北月

庭の面に昔の志かくさてちりし世れにけり水流末もうきそ

ちしの年としもの志のためなく行らし昔の流るふるそなかめ

かなかくハ松のさかりなるをしてかのうなるよし

夫木

咲ちる山の野寺のいかのさくの戸もあくりふそ行萩の行さは花

春日野に又君つれのなかいなき なかふころハうかそしらるん

為家卿家歌合に

きりしなかの庭流もあれの中たかうに なかなき流るふ君流久多

建保三年内大臣家歌合に

いかにせん大江の年々のさ○うつりゆるふ年あへてふう清うそてなハ

神楽歌
みやまにハあられふるらしと山なる正木のかつらいろつきにけり
為家卿家百首
さらしてけふをむかへの人にかゝることの葉もあはれいにしへて
玉葉
神かきやかさしの竹にすれるかけのしるしのうちめハ清めし庭の末つゆかれ
家集
くれかへてこよひともあれなおなれや身をうくしもむ谷の呉竹
かしこあへぬ杉のしるしのいかなれハこゝろをとゝめる清むよの夜半
うけかへし二代ゆりすゝのひとつしハこゝろかきりて君ちよふらん
竹さ衣よゝにかけあれぬかけよの末きこえそ郎の家にゆれ清く
百首
ひさかたの竹のむかしの姉ちかひちきりありてやかけひをあかん
宗竹ハ大舜の后娥皇女英といふ二妃舜のわかれをかなしひて泪
哭しなか泪の竹の葉にかゝりて宗の竹となれりと云云

夫木
名ふハかりなからんとても日見ぬの名その杉清待に生の坊ゆ
宝治二年百首
かけもなきむかしの竹かも知らぬ世に志れたるの涼し山川清水
家集
きこゆなり川そのゆくを清きこと枝に生ける竹ハせくもの
なきかとよいつこの竜の山くてしもしら日ハきのふこそ待清くる
志賀の国にたに生る竜も
寛喜元年女御入内御屏風
和歌のうらや入江のあしの君清露かけかひるに竹りんとやらし
建保百首
皇なよとていく田の池ひろ川清水の秋るやさしきたるの秋の月
同四年百首
なくらにかけ秋くさの本の葉ちりそそて枝に清き鳥のいろそのことも家
百首

さくらにも又見こゆる婦くろ也の諸き端に加て乱し青柳流いゝ也

家集

まつの葉たちるかれにもおろかくむ折端のむめの花の香に蝶

舞ひまやかに舞ふ鮎の河柳も乙葉うち出で衣行きゝ節をなく

住吉社卅首

今日あらは紀の浦も見るへしいく葉ともをとらしのうら

建保百首

ふしみの草の露にうつて太刀のさやはゆかしあれ（もうイ）はこえなん

光明峯寺家歌合

川な為ハ岩こすなくの音もとの見ゆつハ中まてひきとも川つ流る

しのゝ十津川もし出て申らし

家集

うつひ出の雪の花の麓をひとさて　いつまてむ梅をもれておくらむ

新後拾遺

いかにして行てみまし此のゝ流れのしるの流れ流も今にゐり

六百番歌合

いかて嵐吹出の流も花そ見ゆしても雲ゐの上の菊ふかうたえん

家集に

をらるゝ川もあらしやとて流も八十瀬の雲に花を見る衛

後撰に　則をらる山いせ男の（ヲ）袖の拾衣見ゆれはをやえらん

此歌抄云をらる山とハいせかのといふよあるしたにハ男蜑かつきをそ刻ハ

蜑の海に入時着きてをなし給則えらくへき衣をと称なるへし

雲明の月ハ中ゆるよう川ひて出るかきての流も川出へし

入をとも雲の流もハうるもあらしひと衣岩の色ぬの出の母ゆるし

流くはのかぬくハ中也のきあらもくはとの流もあるいそくうら舞

山のきやかにとかても川の盛て月をきし入枝きの色くうつ水

うち入流うきの麻の裾も色くうてそ吹うるいきのこをうる水

雪あうてとしもくれに川世申しあるのは流申にふきの坊ら

光明峯寺家歌合に

うく舞のさ流にもあうをあるハ江のあるの小舟の水月てこむの所

なにをかれハ人のこゝろのあらく候ハまつちしきをなきころに○みてなれ
まつちハ賎ならしもしげくハむつくつみてなり
後撰吟に　遊女を
それとなれハきぬ○と云のになるのこともかはへハいかされらくこなかり
遊女とも　かゝるのことなり
家集
はるか○のくも○をりかゝるとさゝえくも露をりやうきこなこのとも郷
續古今
しかりなくいせをの海士のなをうたもかをはらひ舟ハあつとおきけ
玉吟　古宅月
故の月をあれしらかるさとに　如何里ゑとの鳴神も久かし
かつら川なかハさゝ出れ清く水のなての清こもせゑやかかる哉
こかりく水の行ハしさかくハうつ川かれくと云
西その歌とこ作りける時旅の歌としてよめる
千載
ききみ宿もゝかる国のうら路の小夜なかる声ハおり袖の露こハうけきと

声くも神かと八千尋の声の物思ひして袖ぬらしてよめり
同
まてふこもおきまでしれかゝ鳴に渡るむかすひゝきえわる帰かのくれ
歌しくもと
あはれはかなき曙の空に又はかなくみえと契りて誰をまつ中もあるかな
恋ハ心絶てかなきはかなくも恋の歌し
西その歌とこ作りける時菊の歌とてよめる
同
さえけるひとつに霧に渡りくてや月あかりかるに虫の音きこえくの宮
歌しくもと
同
山かつれ中川のあたりて外にあめてしれつ袖ぬれに月にこよひも
同
さる月のときかしらひさらにひきてもかる板もひしなるかせえ
此歌の心ハ昔に昔のこゝろしてとくとなし其昔にし昔て其中にて
さあてもあるかりきき哉し
新古今 撰
歌しくもと
草のゝへの露をも清玉章に新編の梶ハあまの川原もなし
七夕の手向の歌くにハ家て硯水よとる事也

朝日さす春日の山法くも清き河に住む人は雲もかゝらで
心しやさらば月のひかりちるちらの山のあなたの生をしめらん

西行歌集

題しらず

岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水道もとむらん

春の歌とて

ふり積し高嶺のみ雪とけにけり清滝川の水のしら波

題不知

とめこかし梅さかりなるわが宿をうときも人はをりにこそよれ

とめこかしハ求め来よかし

よしのやまさくらかえだに雪ちりて花おそげなる年にも有かな

花の歌とてよめる

よし野山こぞのしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花を尋ねむ

題しらず

なかむとて花にもいたくなれぬれバちる別こそかなしかりけれ

きかずともこゝをせにせん郭公山田の原の杉むらだち

郭公ふかき峯より出にけり外山のすそに声のおち来る

題しらず

よし野人にしられけん庵の梅かけはしりとてみることもなき

ともきつる野中の草のまろひてもとしくしくむかふなちの坂

同

さすらへてものおもはぬ人なき人こゝろにしもあはれはしる

あはれいかにあさ茅か庭のこゝろかんあはれ知らぬ世はさくなり

同

こゝろなき身にもあはれはしられけり鴫たつ澤の秋の夕くれ

秋の歌とてよみ侍る

わかれけり秋はいかなる旅人のあはれはさとりにけりの

題しらず

小山田はいかにしつくなく鹿の音にかよひさそひてかよふらんけり

同

きりきりすなく夜にあきの夜のなかくなるこゝろのさひしさよ行

とこよのかせにうつる松のためにすゝしきこゝろよりのこゝろ

しら雲はたちさかりけてもいく山田の面にはしつゝ春添

題しらず

中川おちにしほのうたゝねにこゝろのあはれはしるもさらん

同

月やはれの雲はたれになくこゝろ行くきさしくれけり

同

秋萩やこゝろのさかりもしろくみむいこゝろのうけに雲の枕をも添

同

とゝめりのさかりの花ちるはなともいそく月をさける

同

はの国は春にはのきえはるかにやあはれの花にみせけるを

さかりさきに又ありしの又もあさけり 唐にあらん花の山さと

歳暮に人に遣はしける

なかりつゝいはねし人やおもふにかくしにうつしのうはとあそ

題不知

ひろしまに庭にうきかたち清く咲きてうつ世にも似ぬ年のくれかな

こちのくんちやうりから中にめでたいさかなの塚の作りてこハせんそ
これなん中村の墓とこう云ふれハ中村とハいつまでの人をとこひ作まハ
実方の事と云ふんにうかゝに気の事にて書かれの有かのこととえて
あつかしく思人作りけれハ

作も世ねその名をうつしこくめでたきてうれ押しもよききうつことを添こう

無常の心を

いかなりれハいつかのなくさこともあれハ後の世知りて心よのもとくらし

人ににて人まて歎きりうる人につくりけり

其死何とのかなりけるのことりかる人てここそハいよのてりりうらん

こちのうらへ中つりうる人は餞し作りけるに

云いなハ日中何とても雨のあめ出んかつかのうこれ中ふされの坊ら

ごゆき雨に修行せんとて出るちりる人に何かりうえてとあつ

ふのあゆん云もこうろやあつくさひとくるもとハいかにとあへとも
さうともと作あかよそびきのむかし者ての每より縁ひこえぬ為まハ

題しらを

こやこにて月ひあ出てかすひしハ稀にもかうるぬとも雨ぬあつけり

月見ハとちさうていてしかの郷のひとのやこらひ袖ぬらしをらむ

天王寺へ出しり作りけるに縁に雨降られハ江戸に帰りかりけるに
かし作りさうりけるハちあつ

世の中ひいとふまてみそこうり気がつのやとうひかしむ云り哉

遊し　　　　拾女ゆ

とゆいとふかひとくしきうハかつの中ふ心とひ哉とかりふてるうそ

其のうちに出るりけるにちと作りけるに

あつらけてかこ西へしとかのきやあハれなりりうさよの中あり

題しらを

あろうなり岩涼をさ雨ふぞうかていとめなけハてあのみのハそそや

うとあいぬこうろのこうにあしをてよ去るせてみそハ弟ゆも　桁光

同

なにとなくさらふかなしきいのちかな　あくへハうきもかはかなしとて
かなしくいひとる明の世なりせハ浮世とすきをハなれさるなり

同

あまてのいのちもなきとおもひしハ今ハかりたる心なりかし
おもひきのはてそ縁なきとなきかなとこころにおもひの月にこめて
有明ハおもひ出ありやと云のうちにあとれ志のこめ浮かる
人ハこて其のゆくきも又すくなり行かるとふ一浄をとうつきてゆく

恋の歌とてよめる

さてあなたにうきなとや行ちいのきみかけなりてよそくかきなるしかハ

題しらず

あはれとていはのこころのなきをあはれ物おもひいふかなる歎きに
身をつきハ人のところもかなしきにうらきにもなりてさてうかれ
月のうやうハの浮ふるところにておもひもいてハさくら浮かにさむ
なるもありれわしもいひと心なりいて心と月に出浮し浮かる
ものかなしてあるひ浮く秋の月の色にいらはうるなりあはれなるらん

題しらず

うとくなりいひしこまやかにてうきゆん花のきえ紅くなる行もあらしる
今さら縁かなひいてよそにちきりしハ又とれんとての情あり計季
あはれとしらぬひとのあとなかりけんものかなしやの花浮かハ花

同

世の中にかなし人ハ在へてちりぬ浮かはつみをさそもいひちうもせし
月おもひてこころうつりかはしつつの秋にもさらに見えめりあひなる
さなりくる月をを神にやよりしきものあきこそかなしいふさまハ
月の色にこころはかなくなるにしてさやこそ出る哀れなるせハ
とつひとなくハうき世をいとふに志しめん哀れハなきを秋のよの月
又になり哀れの秋をおもひのさまになるらふ月のうちにきたなく

題不知

書かく縁に鈴山ちかきの秋されハかなひなるしたなるきものに

いせにまかりける時

鈴鹿山うき世をよそにふりすてていかになりゆくわが身なるらん

あつまのかたへ修行し侍るに冨士の山をみて
風になひくふしのけふりの空にきえてゆくへもしらぬわか思ひかな
題しらす
ちりの山出しとおもふ方をそ亦ちらぬかはとひとやすらむ
山ふかくさこそ心はかよふともすまてあはれはしらんものかは
山かけに住ける比いつれもかはりて入月もかは世に
かくれ侍てかくれまし志らん山さとの雨ふりをさむ山さとの庵
志のひせて世に出るをはしかくれ人はうきこころあるやゝ
山里にうき世いとはん友もかなくやしくすきしむかしかたらん
やまさとは人こさせしとおもはねとこはるゝ事そうとくなりゆく
人来すもかなし
同
あはれさの粗濃かり山にある檐のこのちり下急のもとこえ中ふく純
山かけのころ器つけて志ものさひしさよそろ雨のをやあれ
志のはれぬ聲ひくらしにむかしてさひしさにひくせ志のひくさむ
むかしみし庭のこ松にとしふりてあらしの音をこすゑにそきく
これやミしむかしすミけんあとならんよもきか露に月のかゝれる
同
かとなりぬ身にもこゝろはかよひけりうかれてハ又くらきにゆく
かろきみにかりねのひくふかきかてもさそさいはふ涙のおもひいは
うき月かいくてけう身にさくらむひきのふのひともなふハなれ世に
うけられ人のそうたかひいてこゝろもやかれもなき志けむき
同
いはふもとゆきハてとあてあらん宗法いかゝの志りてある世よ
月のゆくやまにこゝろをおくりてやかるそのちとの身はいかにせん
かくれなき入あひのかねのをとすかりにのやあはれきくらんともらん
同
世をいとふ名たにもさハとゝめおきてかすならぬ身のおもひ出にせん
身のうさをおもひしらてややみなましそむくならひのなき世なりせハ
いとふへき世にあらハやハ去みもせてゆかんとすらん方のかりん
あふにまたとおもふこゝろのあつまりてもさるゝ世のいとはしき

なさけありしむかしのこゝろばへのまゝにてあらく人ゆゝしき世にもなる哉

寂蓮　今にはじめて百首詠進せられしにいなびて人々の歌に評せられ

にて世に行事もかはる人にも比名せらるゝの事にかゝるものは皆

行此歌にも少き人々の南海道三位後秋にやとて侍て静なる

此歌とて入れたりとて出してつかはしたるなかに事行待る

と昔の世もこのなさけのこゝろばへもとより定なくはなほ世にきこゆ

題不知

こゝろあらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを

ながめ侍りけるに神路山月さやかなる誓ひありて天の下をばてらす成けり

いせの月よみの社にまゐりて月を見てよめる

さやかなる鷲の高ねの雲井より影やはらぐる月よみの森

西行をよびはべりけるに まかるべきよしはいひながらまうでこで月のあかゝりけるに門の前をとほるときゝてよみてつかはしける　待賢門院堀河

西へゆくしるべとおもふ月かげのそらだのめこそかひなかりけれ　西行

返し

立いらで雲まをわけし月かげはまたぬけしきやそらにみえけん

勸修寺にて

世をすてゝこゝろのすまふをも月は西の山辺やちかくなるらん

右九十四首ハ新古今集の歌なり

夫木

なか川やよにまさる名のいはの中にかくまとふるとあきの夜すがらも

あふみぢや伊吹おろしの風さえて朝日にしるきいやしらゆきん

家集に

これも秋や人なき宿の月影をたゞ独ゐて見ればなりけり

そひ侍ひなくて侍りしを山里のさびしき世のこゝろところは

とかくみをこゞれる谷清葛やかたらふ人をとふきの松の香

かくてゆく神にも我をまちわびるかきの松まれ野辺のかなしさ

秋の夜の月のひかりの影ふかきてながむるにも都しのばれ

ねなくてに池水にめぐりていしのそこまでもあはれ汀の月

見せばやなゝよの山に月さえて大井河波に宿るなりしを

夫木

あやうさにいとゆふをはらふちるとも風岩のうきみむかきのうけえち
ひるてたをころをいとゆ志けの女かいとく水にや風月かけ
家もさそ庭の眞砂の清ち行かへひさてかひくそろ光みを行か風
志け田河きしの笆をえけるせハぬせんの南ふふかる卯の花

白川七百首

見るあハし池のさゝなみ（小波）にえるさちてものかすみ袖のぬ風かかるら

家集に

入行いの〇のこかるを山てらハ如くらむ心も行されかかる
秋かとのまれ清かやのうう如しよそとそるものハおくまかる岩
かりかくゆきめくるの垣清卯の花ひうまひしく宮のさかせつる花
音りして岩ふさハし風あるまそなをちかれの窓清なとあり今も

夫木

こゑをあをゑるこのかりやふあくさ良ハ志り行ハまるを風ものふなそ今風
ゆふ月良しかさちらし難波江のあしの葉ふしこゑる志くるみ

荻ふこもちのとを川の上来あれハ志けえをうきよゆけ清かくえに
百枝ハいせふ行てそあり松の百枝とも百枝の松とも讀り志けえとハ
下枝し松ふそあり又山吹の志けえとも

家集に

ともきかハさるを行まや庭清面にかるを（若竹）行あきの南とし志ららむ
きるみくく家をゆくくふちりかゝ風荻かと払りみ竹清あらしまし
聲ふそろのきかれ集ふもかとり今りのちる世になき家ひとのこる鶴ハ
かし行とと来あれ月をかなし今毛くしちりちこの中川のうさかれ
名集さし紀のゆけハさるふ又えるこふハちらのうとを添かくん
万代紀山田の原清行や杉にかゆしきそて心もハかかり
これハ毎りし志ぬの志るしそかりをそんくまてかりふういのあれく

夫木

いハまもるく荻りまえゆのひましにこのてうしをの花さんれにかり
かしハ本の葉まりの林のゆししらむ紀りてをかりしてを南さう花

信田杜百首ヨ

しほのみちくふれちきりびしほ風へまてあびちもうひ浜ハつもる那

家集ふ

君こふるなみの宗浜いろびさへしるひてをむ風ゆうしられ那

をこうげるいくこの浦びるとうひてあびはふく風ゆくうるをられ

とこうハやさ人のまふるくるるまかれ袖をゆふ

山ふかくきちり鳥のそとハせてものか浜づきめくろふ浜声し

さくらたに世のなるるさびるものみ月ふぬえあれにて御明ゆのくるる

やましまハ谷浜のきひのきえてくま水こひ多浜ゆくきこゆるなり

夫木

しる吹ハよ那さく波のか風ゆらひふさくら貝をる三鳴江のうら

あふかくるしかひふひまていてくむ白洲のさしれ浜小貝ひろひふ

波あるふころものうるの袖貝そしかひふうらのくてこそくる那

あらし吹風吹上の浜浜をくる貝風のかしかろ哉いなき拾はん

浜ちかくしくくの浜のかくもと貝ひろひみそくもかめかやうる那

あきちかく竹浜（越前）とゆうのそとめ貝うきつき世ふもあひふける

しかみむ風ちかうの小貝ひろふとていろの浦（越前）のるるとハいふかやあらん

家集

今そしる風ゆさこのうらのうちる貝ひろハ浦そてかふあるきう

後撰よ

浜こるをるあびひのくうが浜ときくてるくのはるびとなれあくく

夫木

あさの川あるれてくる風あびらまてる浦のはる風さくらふのいと

家集

うち川のえるれかまふるうものうるよちそふ鯉のむろゆけ

しるあるく小鮎ひきれてくる御よちるみゆけるこめのさしくこ

秋の比ふきごこ浜ゆかの色風あくうの一くしのを続きひて

いしあごのる雨の岸ろかるあさにきる風月白ハかりやいと風

夫木

まてゆるいのちそこあるひよハ那 千ここのころもあて久しかるまし

山かくき秋をとくて入いしの二つ浜のそこのそらかうきう那

家集

すみなれし人のふかき塵ひあらそふころ世と思ハんや
それ程よはさほまほしけり今朝あせをいふきのゝけふ高志山なり
いとゝ涼しかりしを待り拾あるひらきそあらの浪ふかうひてまてらる
波賀比濱志ゝの宿かさりしを待り所なりとあり
老はてしにあたらり世の中し この春の花ぞ見ゆる待まぬけりぬあらせん

玉葉に

尋ねゆきて行りくちの世かくよ中川 行と志のあかきいひとも事なれこゝを
うきあきよりて身あるこのが涼みぬ いさいらぬふと思ふに行ハまだに

山家集に　家ゝ殊春

かとよしにふる小中川にかゝるまで やとてふ見しにたるハ身ふなり

千載　寒夜月といふ事をよみ侍りける

君かすむ庭の木の葉ぞ嫁しまて月ハ見ゆると云ふ人もなき

月の歌とてよめる

同　この世にて六十年ハ過ぎぬ秋の月志ての山路も面かはりすな

同　こん世にハこゝろの中にあらはさん あかてやみぬる月の光を

世をのかれてのち白河の花を見てよめる

同　ちるを見て帰るこゝろやさくら花 むかしにかはるしるし成らん

家執者の白河にて遁世の志ありたるを思ふべし

花の歌あまたよみ侍りける時

同　そのをりにまつひぬ公のいつてのこりきむとてをてくきとおもひに思ふまし

拾果しと申す身を家執者の心ハいつてのこりしをやとし此歌ニ字をこ
川の歌合後成の判詞にもあくとゝ評しておはす

同　佛にハさくらの花をたてまつれ わかのちの世を人とふらはゝ

朗詠ニ　菅家　為ニ是花ノ時供ニ世尊ニ　源氏浄法の中に佛にも奉れ
まへ申しあり翻訳や

新しことを

わろうきのあはれふこゝろの〇の恵ひこゝろの見えふこゝろ入れてみてきく
見え歌無常ニて高音をしらぬ所に観しらぬ心やその歌中に義を
付侍らぬりて意味法るへし

同 いつくにか身をかくさまし いとひいてゝうき世にふかき山なかりせハ

浮世にふかき山なきといとひ出ても身をかくすふかき山なくハよの心也し

同 おほかたの露にハなにのなるならん たもとにおくハ涙なりけり

題しらす

これハ秋をかなしむ泪の袂の露を詠してそて大方の秋の露に何のなるならんと

同 鷲の山月を入ぬと見る人ハくらきにまよふこゝろなりけり

寿量品の心をよめる

常在霊鷲山の理を知らすして仏ハ滅度しましますと思ふ人ハ月の入れぬやうに思ひてあるとし 但謂我滅度なとの経文の心なるへし

高野の山を住うかれて後伊勢の国二見の浦の山寺に侍りけるに

太神宮の御山をハ神路山と申 大日如来の御垂跡を思ひてよみ侍る

同 ふかく入て神路のおくをたつぬれハ又うへもなき峯の松風

大日如来の御垂跡とハ 聖武天皇東大寺を創しなりんとて天平十三年に神意をうかゝはんとて行基法師并右大臣橘公をして伊勢へ勅使にてまうてらるゝ時其年十一月十五日の夜帝の御夢に皇太神宮告てのたまはく日輪ハ是毘盧舎那也 帝得テ此意ヲ為ニ営興ヲとのたまひてハ日輪のかたちを現し給ふ其光赫如たりと神宮雑事并元亨釈書十八に出たり 委可考全篇

歌の心ハ伊勢の神道をふかく奥残て尋れハ無上の大毘盧舎那にておはしますとし大かたの御事とハ大日也し

同 あらうき雲ゐのとほにかゝる月のかけ袖にやとれるとへしとハ

題しらす

月ハ天ふのとかしを恋の泪の神に宿んとハ思ふかりしとし

同 おもとうしその夜の夢ハさめてあれなかれ行かりハかゝるへかれと

長夜の眠とハ生死流転のうちに迷ふ事なれハなかき眠にたとへたるとも

おふ夢ハさめされとし

同 ものおもへとかゝらぬ人もあるものをあはれなりける身のちきりかな

題不知

かゝらぬハかくおもはしかゝるきらひなる前世の業因を歎く心也し

月前恋といへる心をよみ侍りて

同 なげけとて月やはものをおもはするかこちがほなるわがなみだかな

玄旨云此歌月に向ひて心に物思ひして月の所為をいひかこち
ながらもさすがにひかれてかなしむか平懐の様也是西行の
風骨也深く心を付べき上手の歌なるべしと云云

世をのがれて後修行し侍りしに海路にて月をみてよめる

同 けさのかはるなみのはなかすそこにて月をみるかな

同行の上人西住秋の比わづらふ事ありて侍りけるに侍れば
同 もろともにながめながめて秋の月ひとりにならんことぞかなしき

西住法師身まかりけるに正念なりけるよしききて寂然
法師のもとにつかはしける　　寂然法師

同 みだれずとをはりきくこそうれしけれさてもわかれはなぐさまねども

同 この世にて又あふまじきかなしさにすすめし人ぞ心みだれし

定家卿八代集秀歌に千載集中の秀歌の一首也 玄旨法印云凡
歌の事定家卿ハ新古今の頃上の集也 三代集中にてハ其内にも千載好まれ
とぞよくも次第に陵夷して金葉詞花にてハことに其ハ一風換
りて西行などいふ者もせられし世移て後成卿千載集を
えらばれし後金葉の風を去て歌の中興せりと詠哥
大概抄にあり西行歌の風体これらの詞にてしるべしと云云

花の歌とてよめる

をしなべて花のさかりになりにけり山のはごとにかかる白雲

家集
水なしとききてふりにし勝間田の池あらたむるさみだれのころ　西行

同 [illegible] 同

寂蓮歌集

寂蓮法師　中務少輔俗名定長
俊海法師子俊猶子
建仁二年七月十九日早世

摂政家百首歌合に
今ハとてたのむの雁もうちわひぬおほろ月夜のあけほのゝ空

和歌所にて歌つかうまつりしに春の歌
かつらきやたかまのさくら咲にけりたつたのおくにかゝるしら雲

千五百番歌合に
思ひたつ鳥ハふるすもたのむらんなれぬる花のあとの夕くれ
ちりにけりあはれうらみの誰なれハ花のあととふ春の山かせ

五十首歌奉りしに
くれてゆく春のみなとハしらねとも霞におつるうちの柴舟

摂政家百首歌合に鵜川をよめる
鵜かひ舟たかせさしこす程なれやむすほれゆくかゝり火のかけ

題しらす
さひしさハそのいろとしもなかりけりまきたつ山のあきの夕くれ

月前松風

月ハなほもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋かぜぞふく

百首歌奉りし時

野分せし小野の草ぶしあれはてゝみ山にふかきさをしかの声

摂政太政大臣家に侍りける時月の歌五十首よませ侍りけるに

ひとめ見し野辺のけしきハうらかれて露のよすがにやどる月かな

百首歌奉りしとき

ものおもふ袖より露やならひけんあき風吹ハたへぬものとハ

五十首歌奉りし時

ひとむらの家もゆかしきかなしさハ露にきえかへりつゝの秋風あはれの中にかな

摂政太政大臣家に侍りける時百首歌よませ侍りけるに

かさゝぎの雲のかけはし秋くれて夜はにハ霜やさえわたるらん

五十首歌奉りし時

たえ〴〵にさとわく月の光かな時雨をおくる夜半のむら雲

入道前関白右大臣に侍りける時家の歌合に雪をよめる

待人も今朝だに人のまたれしハさびしきのさとも清雪の中にふられ

雪の朝大原にてよみ侍りける

たづねきて道わけわぶる人もあらじいくへもつもれ庭の白雪

題しらず　イニ海辺歳暮

老の波こえける身こそあはれなれことしも今ハ末の松山

八月十五夜和歌所歌合に月多秋友といふ事を

高砂の松もむかしになりぬべしなほゆくすゑハ秋の夜の月

前参議教長高野にこもりて侍りけるが病ひかぎりになり侍りぬと聞て

頼輔卿まかりけるほどに申つかはしける

たづねきていかにあはれとながむらん跡なき山の峯の白雲

歌の事侍りける人にハなどとうけれバ

あはれとも心におもふほどばかりいはれぬべくハとひこそハせめ

摂政家の歌合に　夏恋

おもひあれは袖にほたるをつゝみてもいはゞやものをとふ人ハなし

摂政家歌合によみ侍りける

ありとてもあはぬためしの名とり川くちだにはてね瀬〻の埋もれ

摂政家百首歌よみ侍りけるに
身をさらぬかげのひかりはかゝる庭の面のきりとふ人そなきにたはれる

恋の歌

うつゝにはゆめに見しよりいまはたゞ身はなれともおもひあはれなかにかゝる

釈教所にて歌合し侍りしに　逢不遇恋の心を

さきにはあふよもあらしさきつるは身をなかさりけり

摂政家百首歌に

こゝろにしみし林のみどりよりやすらんうきたちにひかりかゝるかな

釈しるを

あるかは何身もうき夜はへき禅定のなかれこそなほのかたみなりけり

眺望の心を

釈教のくもをさ川の末こえてふあらむ月は西をさしてのみこそ

山家述懐といふ心を

うちいでてやまの木の葉のながれもなき山路とあるかなゝかの

守覚法親王五十首歌読侍りしに

まよひてもおなじうきよの世なりけり身をそまりなる心あるらむ

遠情の心を

身のうさにかなしびなりぬいかにせんいとひあかしも捨るべき身を

釈しるを

うとかりし身は西なれのみかしまていつかまちみしひかりこゝにあるらん

摂政家百首歌詠に十乗の心をよみけるに　聖衆来迎楽

ひかされの雲路にさしかゝる琴の音にうき世をすこしはなるゝよの松風

蓮華初開楽

これやこのうき世のかりのすみかんとおもひのこゝろの行けるかな

得不退転楽

あまた緒もちりぬるは手向になしてまたさえかへり見るかな

引接結縁楽

立のきうきつらきこゝろをもかくれえらしとやこゝろもとなし

法師品加刀杖尾石念仏故応忍の心を

かくれなきの窓のうちみるにうきせをはらうきせめのきれぬ思ふかな

右三十七首新古今にのせられたり

千五百番歌合

身にちかきつゝ月のかけひ袖の露○をはらふ秋風そいつてともし

正徳（イニ保）二年百首

君か代ハ八雲の道のちりもなくまたむもとも清き 和歌の浦波

八雲たつ出雲の神代の袖振しるしてこそ

夫木

うきにちかくかゝる雲のかけにはなれぬやこの世なるらん

新六

もゝのうてやうらのうき涼のいさり火やみて次焼まてなかりけり

夫木

ことこかのふこの涼の実ハ清見浮波らふ清しふ岩清水をそ

山さとハ園生の野辺の花さくらはのうらふ旅○まさるう

宝治百首

けふ清むさは沢の水のけふも水はそれをめくむ春の色かな

百首

あつ磯の岩にしてもとつ川波のうちよせて袖のぬれ

十題百首

まつらし河むら雨ふみかくやうせてそなかれる水もまさりなりけり

一字抄ニ　故郷初雪

清ちなさる所もむかしふなれる絲とやちりしの名の今朝の初雪

千五百番

夜刈の行く月の空のをとりして月のこのこ秋このゆふさまそ

探体の三種なり未考

類題

秋の野ふして庭かくもむ鹿のこゑをきつこふうらみ給ふなかな

同　宗居竹虫

ふしみ竹のとおれ行やいひなくあまりなれ行くむしの声かな

百首

うき身をハ清くやの外ふまむ思の玉と見わたせなかれ絲とそなる

さゝやハ塚屋也

十題百首

いなかやの杉のいほりの窓あけて行かまて中待声もかのふ

家集

あきかけハ虫の〇まてハ志のしけきそら涼しくあれたる庭の名やける

十題百首

濱千鳥のうさなかくもとはしきなくにてかすひらちるら秋風のうらなみ

さる中ふハいくへもかさなる故にかく申なり

同

志川の女かこて染もくしき多居か非さくら麻たちくものしら路

八雲御抄ニ桜麻ハ麻の名也云云麻の花と秀句ふうけていふ也

かけふてくもの〇の奥のおかくしハおかくそらのひも染きめくらは

こくの三渕のあか柏とハ長明伊勢記ニ云志摩国三くの渕と云所に

ある木の上ふかるかのやふにて生るをの名てきるかるを時ならふして

落るをハこゝろそへて雨に落るかはかるを取その落葉ニみてとふ

東のおきとなやいひ待へろこれハ神文四度の御かたうの時なるを

入御し云云下略

夫木

山路ふミ〇のさくらさくらと庭に落るかかちるのさを

さくら栗也

百首

申しさとハ柿のめこちふたとあれても志られもなくなる路もさかゆく

十題百首

あこのかへにあかハかくまつし四の緒のちきるもあはれ志かちあなかく

志からハ枝保持也

正治二年百首

こもとれハ山かれのこま申しふなく鳥のおもひさこめ夜并の秋来なる

夫木

書の申しふ鳴るとハ雪山と云山に寒苦鳥と云鳥ありて是をいふ也

ちりかへきなしの立枝のめこちよめどもかならのきちうかなる

正治二年百首

おほとのいさゝやいりえとの花ひ人あやむひのかみしこゝろよ
百首
春の日乃はしるふるひかりさしたるの行衛もいろぐ流声
十題百首
鶯のなくやあをはるかへし山かけのこのかたらく鳴中にかの声
紀のくに四十のめやすくかすみこなりけりむしのとみうび
あられ降し夜を山のいろび絹人とやえてこなもきゆらでちかしとな
ゆしこゑ
あさ日のなかとくらうれきそのさき端に流るゝかしいも花よる
これも又さびしなのを行衛もあらでしかし冬の枯くさの下草
正治二年百首
さかりしゆく路のたゝ流いあるなかり野ひのかしのおとぞなか声
百首
鶉鳴しきるの草葉のかぶいてゆふしとこあり駒流かく聲
十題百首
あふ坂の中に流るゝゑそゆらむとや流かびたゆたひてきゝ鳴ゝん
とりふるた朝霞もあらぬのゝ猫のあしとはわかちきゝ鳴ゝん
人を出てゝもてとせぬかなてりみらぬきの冬を流そうちられ
うきみふハさいの生角えてしる袖の露ともこゞさりやと
夜の月もかたらふ知らぬこすとかきりふ行水竹のみちたせ
うきりふ蜻蛉し
正治二年百首
ごこゝかりの行くハ路のゆくふてちるゝふすの蝶流いろく
十題百首
井のうとむ中に志こ水の秋流色ハむすふて流く志ゆくゝ
千五百番歌合
波の人ふるとりすゝめし人もあるハそこやの中ふゝちゝ志るへせよ
秦始皇不老不死の薬を求めけし事し
夫木
たゝ名くし月紅もえてなかれ路に流されハ露の下草

類題

よふね漕こゝろもさこそ中ても ここのとまりきこゆるなれとそろ

百首　傀儡

小夜更て ぬれしのきぬのさむしろに きゝし昔の声のゆふよ

同　同

いかにせん山のをちこち夕つけて さかりのうたのこゑの志らへ

小野の篠原近江也 傀儡の名所也 水辺に住て遊女といふ 赤坂に
あそび傀儡といふ 定家卿の歌集にくはしく見ゆる

千載

さらぬたにうき世にしみて志のびてハ ねざめかなしき中川のせゝ
同集に　賀茂の社の歌合に遊女の歌とてよめる

世の中をうきハ今こそうれしけれ 思ひしらずとひとはいふとも
同集に　恋の歌とてよめる

おもひ寝の夢たえてでおきぬれハ 何ハても身のうきつらさ
同集に

呉竹のふしみの志ゐしば かきくもて 雲にやとるか中に旧里の
かの人とり川田にかりくらし あれたる宿にいねかてに 小男鹿の声
ひとりの声ハいたづらに聞えて 理也て秋はものゝいろにそなる

千載
高野にまいりてよみ侍る

あかつきをたかのの山にまちてやこけのしたにも有明の月

△山家集　右大臣家にて霞をよめる

立かへる春やこえぬる霞をかけるたかしの松山

百首歌の中に 霞隔浦といふことを

へたてけるかすみの中に漕隠て かもめハ遠く浦伝ひゆく

山家梅といふことをよみ侍るに

うくひすの谷よりいつる梅かえに花さくさとの春の明ほの

春の歌とて

いかにせん子日かりのに雑(?)しあえんそくむ 若菜につみけり

若人されハ子日の松のことし旅もまこと 萩の焼原に

されさくを嵐にかゝる こ旅の卵いかさへ もゆる春の指ハ

岩○の上になかるゝ身のゆくにハさゝハ花ちりあかもあるにかゝる那
淵となりしをかゝる事をさゝへゆきてかゝる花のうつる白山川
右大臣家歌合に　花
まつ○きそし花ここ有かくや山ふかくむかしのをふかれむかとハ
花留客といふ事を人ゝにかゝわるに
ちりぬらん人もとめらん家のいとふにハ花かゝむかしのこゝろハ
帰雁
花のいろをもらはふに見もそて中くゝ一人もまてすつくハこゝろをさそ
紫花歌合に花をとゝめる
風吹きハこゝ○ふつ山さくらいろのこ有くね雲ゆへ見ゆる
さくら咲く山やく吹ぬらん那の波こえし中川
西園寺歌の中に　更衣
花のいろふこまてハさを有る身あれともうらやもかうき文衣那
大納言公通家十首会に　待郭公といふ事を
うき身にてなかりふハおゝし郭公花ちるそ那をてふちまとや
こちふやかりやいさよしかゝきしあゝしなてもかうむすて
西園寺中に　五月雨
さゝき石のうへかゝこえしつきれ水駒もつゝ有五月雨の頃
夜の歌とて
月ハさしくかあけハつくゆれの戸ひらかひあ人有ふ行かる雲
蘆橘
折ちりし花ちらすやみかかんおか人有ものひ黒染めの袖
泉の前もとこ
まふむすふ水ふハあれのかをいきてくれのおもかきそ夜そむすぶ
夜いま
ふる○君人あれやの八重むくら秋ちりされもさかりなり
あさちふに秋中りおとや志のあらんきつもつもる虫の声く
秋の歌
袖のうへを吹清ちらもあきら露ハ清ゝ萩の声そ身にむ
さ細ゝの露やうつろやうひぬらん葛ふきく人を風の行きた

こよひ晴野への家を去る人にてそ知るにやとれる秋の夜深月
いつはにも世は住うしや住れの月山のおくこのまのうつせよ
晴れ深雲ともさらにまさりけれはこゝろも去りたれ秋の夜の月
いつこ〇てそ思ひなれも人はしけし秋荻秋の去る庭の色のふひとかな
故ありけるの時人の月歌よみ侍りしに
世をひてまかる雲井を去りて古さとにすみかはれ月ハ郷
九月十三夜に　深夜月明といふ事を
あけかたまつにまさりて御かけしつかなる郷こよひの月の名をそふとは
月の歌人々のよみ侍りしに
もとの海の汀に月ハてらせとも出てし夜かれぬ芦辺の千鳥なく
百首の中に
秋きりに月を隠も見えとまつて山なかに色あるゆゑかすみ神なん
擣衣夜長
明かたの寝覚淋しとあれともおかハてた夜ハ衣うつらめ
秋の歌の中に
さゝれ石の庭の蘭ふくき御庭の面にうつとめつとてもさらぬかな
住さらハさいろ深くやまにむしの〇もかまくるてるをあけかたれ
九月尽の心を
暮秋のかしむる小夜も更けれハさいて冬をさそれ物名
百首の中に冬の歌とて
秋ハいぬきりの中かれハおもかけぬさてもとむらふ人ハなし
さむけくさえをとゝそる庭の落葉に山めくりとふしくれある〇さ
住とまりし光かれたりこそ残り郷去るれしぬへき浦の月きた
冬の歌
かた岡や庭を隠にかくし浦のなきへん声とかまくるゝ〇の松かせ
寒夜千鳥
浦くうら浦ひとる小夜ちとり浦しもとも雨も千鳥や立る
氷の歌人々よみ侍りしに
夜さむさを汀のこほりかさと深くも〇て入浦志賀のうら波
山川の汀のこほりこちらきて下もかよふは水かしてなり

谷ふかき宿にこもれるうらみ恋もいかにくるしき思ひや下に侍らん
知らるゝといふへきいろのなけきにもあはれはかなきうきの名も字

恐久恋といふ事を人々によみ侍りけるに

なけきあひこゝろのうちにて袖てらちぬるをとは袖そ知る

寄鐘恋

さりともとおもひしかねの音はうち絶て夜を更けはてぬ

恋の心を

君のかよひちなれは知らてやいとゝなみたうきたつ声ても恋しき折そ
うしさまかつらき人も人々としても君そこひしてもなれぬ袖かは
涙もなみた今さら物にあはきかなしはかなさへしれてうちも涙
いとゝなん事ても何かうらむへきさてもこの我にかゝる涙をまつは

百首の中に恋歌

さこそへき山のなか衣かへすれは世にもなにゝかゝる袖涙はいふかは
よひねとも月よりしといつはりやんなきにもこぬはなきか名もなし
君のゆくとは我君なるも知らぬ思ひうきかとはかなかりけりや今

なかさとの歌にた古き寺かへと侍るに稲寺のかはらにて侍りける
夜月のいときかりけるなるは
あはれさはしひとしほそへて恋しく見えけちのうらやの月をまちて

石清水臨時祭舞人にてなるに彼御山にて立ける侍るに家の
あはれ又こん春もあひ見へきかしと侍れはおもふにかなしかりけん
又もこむと思ひしものをいへとも石清水立ちかへるへくもなかりけれ世のよ

其又の年の二月十五夜さかりに侍りて出家ときこえて入道
静蓮にちきりてあひみたりける後にさそもいかにおもひあまりけると
こひおつりけるかなれは
ゆきとふあよるの浄土にかならすしもその夜雲月の影そ恋しき

返し

涙にそなさむるのゝ雲居の月かきりなきことを世をは出しか

同し時に侍従かはりて

あはれとひとかなしき秋歌の浦ちとりかなしひ入りなも浦はかとは
久し

和歌のうらに入ぬしこちぞうら○こハいと心行ありとてそのなめ
むかし業平朝臣河内國たかやすの郡にかよひける時沖津
白波たつたやま故郷ハ其の人中ねのうらにいとあんやらて
今に傳る世中の春の十日あまりにも語るとも不見にやうつる人の
またなり
形見のかたひのこれりけるさとの名にたてし名残そとゝめけり
いにしへの名残もなしと尋ね来し山井中にかすかなる岩のなかきハ
久し
いはれの池といふ所に水鳥のかけ〳〵鳴けれハ彼名のことはにて
と御ことも語りにかへて
百傳てふきてても袖のぬらくる いはれの池に鳴鴨の声
礒上寺にまうでゝくわうしたれハ石を結る庵のほとりに石あり
そうりをひうしの語もきえける
いそのかみふるの中やしろにけれてあさゆふを佛にそなへて中侍り
小山の跡うらを傳へけるほとりにふ二条院の御墓を見て

六十ばかりかさなりし国のうちきよのして一むかしを名残とけり
右大臣家歌合に
なかれゆく水の行衛なかれよのうつりきハ苔むすまかれ苔路しけり
雑の歌百首の中に
たつ家も行かのあはれハあれものそきえて又ひとりの人の出しさ
法華經廿八品の歌結縁の為人々よみける中に
薬草喩品
草木聚林　隨分受潤
春雨ハ野辺の草木もわかつ○ともそむつこころのひろまりける
五百弟子品
貧人見此珠　其心大歡喜
あさましやころもの珠とむすひんあつとけちなりぬらく袖に
人記品
我爲太子時　羅睺爲長子
我今成仏道　受法爲法子

すゞかりのふむしのねにはきこゆれとさそひけりてはあはれなるらん

法師品

加刀杖尾石　念仏故應忍

かれ木の窓うけるのをとせぬはうき世の軒のしのふなりけり

提婆品

龍女成佛

うきふのゝ沼ひおやめのあれくていふをひとの身とは如らん

勸持品

何故憂色

けふおくさあるゝ見しことゝもおいなてあくねやのはの月

安樂行品

うきよふたつくともあれ世の間に養ふもゆゑのさあふなるら

壽量品

あけまやのまやのにほふ花もうきてかゝふもをあかぬ秋の月かな

隨喜功德品

若分座令座

ことをきゝ法に泣きいなきとはかくことなしの未もなかりし

不輕品

いくかりにあしききこゆるをきてむかしの法にはかなしらん

神力品

南無釈迦牟尼佛

あれのこゑのかふもきこえなる二度法を弘そなりとまへて

囑累品

けむるおといひても神や法をなりてらむまきこの世あるぞは

本事品

其身大燃

きえるのあとのおかふにはあてなからもきえてもこちそおもきはなるとは

普門品

若多瞋意常念恭敬

かれはのちりひろまへにおとすおのあるれいうるもからぬさるらん

妙荘厳王品

いかにしてまことのみちにさそひけんこハ世に知らぬかゝりしなれハ

右七十六首以常徳院殿御本写之重昏之

入撰集不見家集詞以下私勘之

五十首歌よみ侍りし時

新勅撰　後京極摂政家五十首

あれわたるけさやこゝろにさそふらん志からと横山法端の月

いかなりし峯のあらしのやとりしにあるみ山の○の白雲

題しらす

くもりなきのちのかゝやきもゆるとこむ横山いろに出さきよの縁もかな

かふの浦のかすかにみゆる跡のさとも行やうらしかふかる

なそきかしかをたに出ぬ家中のあら浪く跡と立かへらかな

思の歌いかさとに侍りけり

うらみ侍るひとえてもみなかしあらかりきの志れかえて

題不知

なそもかくいくせうつりしよの中におもきみちにもかへりぬる

かくさうめるの麻絹袖もすれてみるぬ家もいまこそかへるらん

後京極摂政家百首歌よみ侍りし

あかのけハ落松つゑ法よ向きいく世そふかくうつの人をつらん

題しらす

今ものゝ秋法なるやいふかんなきうた葛のうらみと見ゆる

寄法

庭の面尓かふるまんすらひかれとも御すのへき袷礼出されし

題しらす

契りさ州か近江を神涙川ありかはへ法二本の杉

悲の歌の中に

との川うちとむれにもかなむし身はさきのめのとらひかなけれハ

秋の歌の中に

身ひは法めハ第宗にいかてまるりん為ふゆへくハそけるかなしと

月の歌のうちに

あかなくもくらくなきまへのあまりて月にゆかなくみをし袖かな

西行法師すゝめ侍りし百首歌に

志らなみのたよりに汀ふかくしらぬ行とさしとめられし此世なりけり

旅の心を

里のあとの鏡をさしひちかはしやまと又くれつめてなかなかにつく

千五百番歌合に

こゝろをやおもひかけしのなかなかにあまりにきえぬ夜半の月かは

守覚法親王家五十首歌に

うき人の汀のこゝろなかなかにとまれとなきもあるしのたいさ

後京極摂政家十首歌合に秋の旅を

あかつきにこゝろしたにてたびねの袖もなみたをかけしかはの実

寄煙恋

うえをこし室の八島のなかなかに下はもえけるこひやはあれ

夕立

谷河濃あまりにて心も知らぬ雲に民家のなかにちる

冬の歌のうちに

神無月志ぐれふるにもあはれなるならぬ袖をむすふこゝろなれ

さ夜ふかき汀の鴨のこゝろなるやうにてむすひけるらん

鷺不知

ときはなる松のこゝろの声はかとよりて窓うつものは木の葉なりけり

田家の心を

あらさりしにやまれたる身ではかなき人のこゝろなるへきこひしけれ

窓近竹と云事を

窓ちかき竹のさえたにききこそありけれやとのうちひそかなる声

守覚法親王家五十首歌よみ侍りける時

木のもとに行かねまだやまのぬかりしの山露のまにさしかゝるらん

千五百番歌合に

かなひたるこゝろのかよひもきこえし志のふ流れよのさかへなる色

前参議教長家歌合に　旅宿月

月みれハきぬ〇の床も志らまて家のこひしさに草由くら哉

守覚法親王家の五十首歌ニ　述懐

うしとのミいとふうき世を行出なれてまのかくやハ月をかなしかるへき

千五百番歌合ニ　さくらを

墨染の袖さへ花にさくらそ哉うらそてこゝろも色にあれとや

ほし時

行とかくさへ法る山の鳥の声もものへかなれハ雲のゆきかひの

影しらを

秋ハきぬここハかりてをハなかめ清ましかりの暮に荻の下葉

遊女を

いかてかく宿もさためぬ波のうへなうきそめのみのよすとハなりけん

夜歌のうちに

あはれたちそえたるもなれハ夏草の露ハ木末に消る蝉のもの声

影しろう

山さとハこゝろまんとやハとそく物し言せぬ人をなふかくもりけん

もとの俤ぬいさかハ家もくもりして世かきものをその端の月

風雅集ニ　千五百番歌合ニ

いにしへの神よりのかゝらん行とうえてこふ火ハ夜中の身るなか

神前の鏡とハ雄略天皇御時ひるにそ浄夢まうてまうえを神とを
めてこれに見るにあか出てさいかさこうに月かとてこそ世中ほけ
其ハ神前に清水に雪の影のうつりけつれハ月と奏しかるに申て
神のあの水を前社のかくてと神道いき

新千載ニ　後京極摂政家六百番歌合ニ

恋しさハこゝそかし神への志らんかハなかめかに人家荻焼中をかく

建仁元年後鳥羽院五十首歌合ニ

峯高れハ雲もとゝにうきものなれてそ外にハうらしこゝろしの山

炭竈

行と知ぬ世にもとまる雨のいつまてかこゝ〇のかりてをも波にこゝろへき

花の盛桜のちいさき枝に結ひ付て寂蓮法師につかはしける

藤原隆信朝臣

きそのなかさとさくらふもいりし山さくらのころ桂つきわたるやいかるな
　遠し
　　後鳥羽院尓五十首歌奉りける時
ねぬなはやかはされてや川水もあはれをそへて
　　千五百番歌合尓
鳴けるよ雲井の雁もこゑたてゝ身はいとゝ寒き秋の夜の波
　如寒者得火
いせの海浦の塩屋にあらなくに濱荻のおとあかしに行きめくるらん
　　右四首新拾遺
谷の水こほりしもをのひきて浪のこゑさにあをふやうもしき
　　新後撰集尓　　よみ人しらす
小山田尓水まきかくる男かこころやとあらしさこえりかのこゑ
　同　　秋歌所尓て六首歌奉りける尓
山人のとりのこゑもそのかけからひとゑをと雪はふかく濱
　新続古今　　千五百番歌合尓

夢のうきはしのあとをおもひしれはうつゝも雲尓夜の中やるか
　同　建仁元年撰歌合尓　河月似氷といふ事を
月きよきこほりてうち川浪せてふ流もあれ水のきく波
　同　　後京極摂政家歌合尓　暮秋
暮てゆく秋の名残も山濃にふ月とちるやあらしのゆく
　よみ人しらす
月さてもあらしさむき夜半のよ嵐のこゑ
　家集五首和歌
　　春
いろはこほるの桜のえにもちる流ののとてこひとのおそ
　　夏
いかにこころもきくすて卯の花かとまかう川のさとを
　　秋
空やるく夜半の袖にそまけしのの月
　　冬

かり音にのきハうつくしく宿りもせぬをと信にわたし吹すり

悲

いかハ哀あるきびしきとおもふてもこゝろのかハりハなかりし哀け

残菊

秋の末法の比の頃くるしほのうきさ人のこゝろ志くさくの名

時雨

くまなき月も影くもるもの前びいりてやみてするし槙の枝ぬれて

さらに任る法九月ハうし時雨しき程に世にあらぬ今吹て蓬

の庵りふるひ詠ぬしありけるを見て殿法師八名

歌いかハきやこのいぬ舟をと偽なるき世のさしくかのひあせとも

なし

ことぬえて世ぬかち山といひし人の何とか詠けるにおとしとなき

九月ハうつろひまかる信の上まかりて侍るにかりし侍るまかるき

歌し作りたる人のわらく十月になりてつかりし名

さへりし卯杖の口まもひさしかく菊の白らう銭知る人なりし添

二条院宮白河にてしめて任給ひて後冷泉の御子に中付

よしかかせらまたれハ

水くきのかよひたる池なる白川法をなれのを御かたちも志をかまき

隆房卿別当時都のかたちこし志れむかしに詠まれ侍

七条に市のふちなるをかハせなれハ上の三条四条の何せうらなるに

わかのよくひかうけうちなれハたえてつかりし名

いかし人の何と池をうのむかし別当この池にも名のふかきをむ世に

勝間田池ハ下総に在 八雲御抄に別当この池にかちなきとも見ゆ

又何かとも万葉集に入ちう 彩林名抄に別当この池ハ今ハ水なしと云云

家集 水なしとみてあかりかし別当この池ありむかし五月雨の比 西行

甚かし 水なしと詠り別当この池の名目しられと又何とあく水なき御に詠

詠もありとを

返し

いかし人の何とふくへるハか別当このいなくん紀りもののハかなそし

出雲の大社より下向して侍る比萬宗のかつかりし名

かくまちうけられけるにそ志はし近へかて八雲の席ふくろをいろいろん
近し
きく人も八雲のそこハ知るまじのびやかにあけくれなかなか
左大臣家御會に　四季恋
あらためてなかなかにむかしにかはれとも新緑のひめハ家にいまた来
春雨ハあまねくもあらて青柳のいとにはかるゝ玉そちりける
落花
山吹ハのきはの花のちるにはいきて花もろともにさくかのやと
落暮卯花
この花のちりゆくハくれはてゝ葉の戸ささぬ玉川のさと
暁更盧橘
夜ふかきにまよひ霧晴の庭もにほふ花たちはなのかをりよ
遠山郭公
かのかたも声をのこせかしきまし空ハ雲くもえてし かの人に
夏草

秋のいろも野近のさとにこのころんひとこゑあきてゆく志のゝせ落
志の落ハ穂にいでぬなかりけりて君恋そふるとをよ落ハ萩薄と云
蟬聲夏深
妹かねもかりふくろの木を涼ちり行ひきるゝやせミのまは残声
蛍火秋近
今ハくもいとまはやかのや夜もしのゝめゆくをも秋ハあれゆくの前にとり
後白河の院いかくましませしをりをもて三四年の後五月御供の
の時六条殿にて　池水久をあり
ひつしうえ居まうちそ白川のせにいまにともかわらすや
郭公遠懐てふこと
言ふ人の声ききめかれしもれぬふるき名とそめてこし
秋恋在野外
ことのはやびききのふるさとにこころもあのころいろあれのさきの野分
被妨客人恋
うち人のねまとふこしもさうにきつる庭にかくさえてそえけれ

閑居聞虫

志げき野に行きゝもたえいほりありまつむしの声々

旅宿鹿

旅のそら草まくらのとこにふかくして袖にうつしきさ鹿のこゑ

紅葉深

よものやま川のもみぢにかくれつゝこえ○くれなゐに色付ぬらん

山路暮

み山ぢや杉のいはかどの跡絶ぬ行末もしらさのきりにゆかせて

民部卿家歌合に　山花

うつゝ○入山志るべの花のかげさそひて見ぬやどる行くそて○の志ら雲

神郊公　新續古今

おくれじと人のこゝろもなき花をさそひて見れはあはれ秋虫の一声

深雪

ありあけの人もこゝろにちらぬ雪のふかきこゝろのそのくもりなさ

夜思水鳥

谷かげの水のうきね○やすらひかねつるをしのひとこゑ

深夜千鳥

波よせのいはのいさり火のかげよりも夜ふかく鳴くちどりかな

故郷初雪

浅からぬこゝろとも知らずまつ人のふるさとの今朝の初雪

鳥羽院殿御遊建仁元年四月和歌の題にて

ときわかぬいろにもあらずこれもまた山ぢのさくらのいろを

これはこれ古今に詠むはこの山路の名をちらぬ花の色をしてよむ

えんと古今に詠むは山路のあはれの色をとて○ていふ

かくろ　座主報恩講

衣のこのいろにかはりてうきよにやの袖のあまた

ことわり

これはこのいまの世に人のこゝろにこころある○のこゝろありてハ

きゝわたるこの世のならひをいかにせむハ庭のゆきあかり

末の秋ふかく野のありててうしろにとりてそへて

こえて行しかひの山路にかゝりて侍りしも なかなかしぐれに色つくるらん

仁和寺教主法印にて梅花久薫といふ事を

いつまでもみむろの山ハ雪ふかくて出る道ありやまよひのひめらん

あつまのかたに侍りし時十月はかり　閑居虫

さびしさに秋もとめのこゑハむしの〇もかれつゝ冬のいかゝなるらん

海辺冬月

清見かたさえし秋ハ浦風さえて月ハ雲路に行つ明の浦

志ら浪を見るまゝにて

なみさわぐ志ら浪の磯をなみよせてハ行とも月のめくみ浪をかく浦

旅宿虫

きりぎりすなきよはる声を故郷の人にきかせはあはれなりせハ

宇治山前撰作の歌よみ立ちさせて人ゝ続て奉るに秋の事も

あはれなるやとりのいかの浪さえて月の光をとむ宇治の山本

東のかた行しときあつまの人の妻なる女の身まかりけるに

をきかへて秋名れハ泪かりける

とくハてかはりしちりハこゝに留りて年ききを見やおくるらん

返し

こゝろことゝきゝて年きき花の中にかくろゝそ此春ハ花みれなる

右贈答二首續後拾遺集にのせられたり

羇中時雨

神無月ふるし〇の行をあらくむまハ袖ちりかゝるもうちしくれつゝ

前大納言殿御會に　故郷雪

高砂のをのへ住さとにあらし吹雪の松も行とふ社なへん

山家雪

をく紀のふるさといふる〇をや冬かれの古葉の志ほれ落

雪中遠望

さうさとの杉縁やなをといつらん雲に行田さくら志ほれもとぬ

家隆と申しハ時なりさてつかりしなる

うきしさも袖に涙すて見るにさ昔のこゝろもいひとせしかた

返し

嬉しさはいふも昔の袖なれも濡むといかゞ頃ゝ合せし
それともはへてつゝしらぬ欤
色ふかくうましくぬハ花ふかきこゝろをねうきの夜なかり
遊し
うましさは見るこの海のなミすれハ志りふそかゝるふかきの世に紅
三方海ハ若狭ミゆきのまでのミハ朱なりの小舟し
萬家歌合に　水鳥
あらし吹風のさむしにかる鳥ハうきねかゝも浦ほとりなり
同　網代
なかき経るあしろの宇ぢハよる波淀むさえかゝりむすふ比なかり
定家か都ニあつらへかゝる強文三日過てしるしとひきくらし
心ひかる様にあの朝日浮かりしかり　定家
三笠山ふミ見し日をうたひしも今朝の空さへ出き詠もなし
遊し
忘かくて行と御ハ浮しこゝろかゝしいやかゝられ志める朽ちに

又これをうき浮わりしかり
袖ふしをはうてもくきまゝしさのけをかゝりて芳みれ志らなり
立秋
おかゝこの秋なるとひやこれなかゝんいろかれ家も神ゆみきなり
左大将家十三首の中　泊瀬花
なかも又三輪の杉むらかゝりしそ花ふかゝ入てはいせの山
宮本野
こゝやきのこゝろれる家でまゝ行ハいろなをりてまゝ志のふかゝとり
隅磨関
月かゝて次との異あるなかれ志りし那さきをあらの詠子
深草里
秋の色浅あかまゝてをかゝりせ泉かれにて秋かゝ草のさ竹
浄見関
都かりふこゝろの実ハきこよそかゝるかふ浮とふ嵐の後まち
野草秋近

秋の色にうつろはぬかさしやすまくハなにはかくとも萩の花ぞちる

藤三位季経娘き今の歌ともの私歌草又なにとかや

どうりかしめておもしろき紙にして結縁経かれ供養しけるに

普門品多於婬欲箇の心を

おもひあまる筆のすさひをうれしくて法の志るへとなるぞ嬉しき

納涼西遺といへる

旅人の野中のしミづむすびしよりこころ知らぬ夕まくれなき　昔

野中の清水ハ歌林良材に播磨の国いなみ野に清水ありしいにしへハめでたき

水にて有けれど末の代になりてぬるくなりけれどむかしを伝へ人ハ

訪ねてのひとくみ仍てゆうしくも志るしを知る事になれり　京今に

いまの人の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む　引

水辺惜暁月

有明の月ぞやどして山清水むすびもあへずあかぬ夜そう

鳥羽院殿にて五月十五日暁聞郭公

ほとときす有明の月清く今宵たにやまのはいつる夜半の声

此歌続千載にいれり

松風暮涼

さびしさや夕暮秋風としのちんと松かへハいつもよしきかせ

遇不逢恋

里ハあまたなむしき床のあらましてみハなくしの秋の夜の吹

以上家集

季経卿三位して仍りけれバ久しくよろこひも申さて

かくしてつゝりける

あるきあとハさらにもこひを位申しむかしふこえむれてまいりけるよ

返し

老のらくかきくてのわ涙くもの申しせうしの何よしにいうことあへき

中将公衡三位せさまて仍りけるにつかりける

ゑうるあとならさくてをうまつりけれこころもかれハあまのこゝハ

返し

あまへのあるゆてゑのかおもひなむこころざし知るもあはれあらさや

文治六年三月十七日殿法印まうて
行幸成ふかひのうち御所にいれのおさうくこかね中将公卿
なり
きみハちしおさうしくうすへられくれのむかしとあらん弟向後まて
室保かるあふ一品經欲をとめ名其昨不労あり
藥王品人ふかりて
夜ひかのみをとめしさるおりしをやうふ中よりねさえ人あり候
院御会　仙家五月雨
ねまてかおきくの家うたあらものそいくちよりあらさうられの源
雨中萩
さけらすの音しをつ露ふかはる南徒郡縁の萩ふ露やそくなり
舎利報恩講　雪中聞法
鷲の峯にしる猿をいふとの志ろ人まても冬の御法流場人
範玄法印奈良の別当なりる云はて流りしら
おとしらうあらのうちこの八重さくらなるのもの共も云をさるへき

夜半落水
うちあけて夜ひくふ志げしさあらハの志らさらうかりふ庭のさヽ波
白河の御ちりうたへ人さかりるちられハ風のあらく吹て
名残あれせて峯のちりそれハ
尋○清うひとハ家治もいとまて峯のこけの中ハ神ふるへるう郷
師光入道のもとにて　閑談与入悪といふ事を人々よミ侍
おとうと○のあらうふ声しハかくらひきて契りハちり法の海くにあけり
帰雁
又もこハやよいくきみをそ人御一くあれもまてやかとうちあらぬ侍く
海辺霞
あらの浦もちさらうけれ渚の海のこゑの人かそてハらはとあらり
日枝山ふ道命行周坊ハ中ふあり海うてみるふ所のあらさ海
実ふこう浪かをうりなれハ事侍さる
ことの浦ふこう浪のいろハくちもとしてもあつきゆくとハ峯の白雲
比叡山大乘院京氣室山ハ枕の下湖ハ麓なり

月さらさまの千里をつゝしきてゆらく法座ハ至明法坊ら
故御
同し後
殿御尓いとひろきろへてうにあれしこ後とのへの久それ
殿法下九月ころ山のかりてあ望ともつれつきてつゝハ
しかろ十そ欲和とくきらし至久れハ
本
あもいまろてぶひそこともゑも那ミ雨戸のゆきにく添まし
返し
さろ後をもてよらいね雨戸法行くあれとあれの行望ハ久つ清くそ
本
をとめの声も山辺尓きこゑあらいろふあろくきワろ才あるらん
此返歌後花
本
大嶽のミ○ろ苗尓きろをきて加ろ花の雨戸尓月をうつるね
返し

山のゐも又あらひあれ大嶽尓さとをハ月の久ゐあらさらむ
本
ときいけろゆき人の稀へそれかて志りともやとふハ子かくも那
久へし
ゆうら雨戸木の葉ちりて嫁とき志ろ往前ハあめひすやそ
本
きく袖の家のかり人もゆきてのびそ雨戸のとそのさ細みる
返し
男鹿あらくあかし秋雨戸のとそあれときくてハ袖を家も霜あ
本
ゆう月ハ園の梢にさとありてワろ才の秋とあめひあらし
久へし
あろあらく末の秋し月もさとあきね寂戸の秋ハいろいろも
本
鹿の○ろ花くる長等の山く苗花稲荷ぶけうや志ろの里人

近し
鹿の〇ぞいなえの跡に住へてもせびらくらる志賀の里人
本
神人も來てこゝ山の麓の中しきび織なめて候
近し
志のゝ花の木を凄ハ月かけのなかれちるの中しきなるらん
本
くれなゐのゆかりめぐりをむかしられめのあはれをなめてさらし
近し
かれる中物の何ぞの山めぐり志られでなむこゝろなるらん
本
のりの水流さく成りぬを末の世びかなへハ今し多えの山寺
久し
法の水ながれなかれもつえなきし世にしまて山の溪ふをあたゝ
彩しくそ

あつま路にこえくる人の跡ぞなきやなさおみ坂の雪のむらきえ
そ那ハこゝろもてねとも梅かえのかをさしこいんくろひともなき
若菴のうさのゝ谷の岩ほらしいつこちうさん日かけなるらん
春の日あのとふかとむ山さとにあの何ぞあるいろかの声
続後秋　御所先度百首　正治百首
白雲のうるかゝ〇ふる〇はらきや那ハこゝやこの峰を末なるらし
志ら〇のうゝふ立くろくろ秘かにこゝろくぬ成るもつゆさらそり
続古今　新ちゝれ花も秘の中ひきて神ね成の葛ハむらし成りけり
久立の名は行河ゝの雲からちりかめひ河へさる秋まの月かけ
そ河ふきくこゝ〇のおゝしも荻の葉ふさとなれなむらの久くれの花
うほらへしこゝれゆかも林のゝ木成りそて〇とハあゆかさらして
新古今　新拾遺　野分せし草のあしあれそて庭ゟ年なかれさ河ゝの声
新続古今　のへハ三れかのひちらふうくらさて雲ゟ木わかれ見明の月
安ふハ三ひもきえるん山さとび志らで出てハぶる人もう那
かとゝ山路の雪ゆあかれもこゝろハうそ成びこひ斗家

これ人のこゝろもをかし　岩清水なかれひさしきなかれてふかりをとめて
袖のうへハ千種にもあやかゝすらん志のふの中川のあれの下はま
山のたひねの床を海にたとへてやとらいつる有明の月
今はいく雲の八重たつかなてもあらはさこりん山人もう那
行人のうよいゐ妹ハいひともなし　庭とらしかくの谷のみなもとち
をこ隠て杉山ふかくおとろえハられそりこゝろに中川りて杉門
うらもうれ山路の末に日ハくれて妹すらのいかにあしのゆか火
うら○清き床の志らさら露にや書ちりて岩也人なしなもつきるまにゆく

御室五十首

久方の雲のうへ路にうらをえて教ひをあまくいふの袖あ○
夜の日ハあふてせいとふ衣手流す事かはりてきあれの衣川名路
あまり汐ハむかしの○中てハあまりせうつらいあり庭の志の床
夕されハ田子のてしわたし鳴て行くのまつらやにこ露もうつ川あり
修学院
山からのこゝろ人うとくあらぬ中川ちえうらう○流志つ雲
言ふよハ真女なせる室の中に慈氏の朝日のかかるさと上

庭の面に岩ふ滝つ岩て行かとふ房中て了わかしに志つるも
ふられの雲に志つ汐のうちつえて名汐たなる鳥の一声

雪似白雲

あらし吹○に清まあれ志らる雲のさ川てこれハ中川の雪行

左大臣家百首五十首

こやこゝろを那のさうそえいてこせハ波なふ志川む志ら河の岸
うき○をる海りの沖の波のうくみかりふ那とふもとある月な
月影ハいとくらまく流る汐てあれの菊なる中川のなる那
かゝ山なる床の袖かくれに流るゝひきそあらふふなるくむさくむの声
牛のなゝふ有る那庭のこゝろある角あるとても岩をれるあのうち
をむ月ハ玉のうれ床ののとさえてこの流庭に有明の頃

影供歌合

遇不逢恋

前ニアリ
里ハあれてむすひしきし床のあるかりて岩ハあるかりの秋風ぞ吹
えんあるかめしりる旅の歌

むさしのゝ家ぢハ袖尓分佗ぬ草の志げミにあれ乃路ハ細く
柳拂水
さゞなミ河ぎしの青柳なびく水にうつるものハしづえさへなびく
影しるき
山のはハふかき浦にあらハれてさむ風ふくのしら立
梅かえにいろぢハのこる姿もかなしきをあはれさそふ
左大臣家百首歌合に　秋雨
こ萩さく片山かげにしのゝめを見るむら雨の音
新後撰　影しるきと
あきてのかよひハよのうとあるて作りし悲のそらもあらし
ゆきのやまとうかよひのさしもなき家もそれもへとさてハあらし
志らなミゆくのみとうハ流るゝをなみてあらしふく風草の志ら雲
貴賤更衣
人ごとに絹のうすものハ風をそ身のころもハなさくかへしき
影しるき
かゝる古衣さらへ雨のせく風なきを春もありし吹し
世中のうきハ今ひとへうきをなきかなしくなミとハいとやミハ
谷のふる里の窓ハおけれて雲にいさよふちらひその声
なかしてさらに身をかれてかくさましてかれしをあるなみ待しなる
夜なれはのの吹の琴も空蟬聲ちゞくこゑハ秋あはれなれ
かのひとりかのうへも家に虫の声のみこすゆる北辺の夕なる
志のやとハ志げ志る志のかゆうにハ志げく　ゆしきし志のかこちハ志げく
されどかぎ悲しうくさきこもひの声月ぞけいとくふりしつの声
志ぐれ後の夕日のいろも袖さへて山かげさむし草のむらさめ
さらしさびしき志のべ小倉山ありのかけにちゝるくならむ
山かけに鳴るもなきなむしゝをなき縞ハ月ぞさむしらずかる
已上御所老若歌合
うつろふて志りし日影を中川の八重にて秋風あさぢかの露
あさ秋の岩ねにゆくる川波のうきやまてなかく袖の露
里ごとに市の中にもあるなへしころもをなゝハたちま深の袖

あさち原なるきこゑとはふちきりけん隣ごなりとなくハあはれとも云よ
宿の戸をとひてかゝるや誰なるらんとひなれたる〇の中川なる
まれとなく人をこゝろかゝるさとの犬の声をむかふる夜はふけにけり

以上圓位法師

雨後紅葉

まだきより(?)こえ行く〇のむらしぐれ木を濡らしの色を何といふなる
影しらぬと

五月雨ハ昔流ることもありて谷水も中にこもりて白くなるなる
後鳥羽院
大井川堰のせきの水やこえぬらんさえたるそのこゑくる源の
和歌の浦や中川の瀬にうつるかげまでハ床をともにかゝる浦の紅

若水

うぐひすの声なくこの流らく声なくゝ白くかふさ汲ふるの山水

寄雲恋

人知れぬうらみにハ結ひの雲なき流れまでハ袖の色ゝかゝらむ

忍恋

いかにして露をハ袖にさはらなん中ゝこゝろなさとの萩はらかな

祈恋

貴船川せゝの岩ねもくだくなり袖はふたゝびさえて

已上左大臣家百首歌合

資盛卿歌合

花の春月流あはれたひとこゝろ宿のいかにのさころれの坊

左大臣家歌合

月とてハさて中々の秋の夜ハなかなかむしやとハさらしなのさと（更科里）

或所歌会に　鹿

鹿の〇にかゝりていつもがれの秋ハ身をうかふにもものおもひなき
秋の夜かく　次納言定家かりにふ泊りて物に付てもふ思ひ
うきねこゝろのうちに松虫の鳴くなる声ハいつもと思ひ
それハさつ(?)もくことゝもさはりしとそれハくうて又の日流
流人中つくてあるさとのくらき声なきならて
きゝ定ぬ旅人のかなしひ流つきならうつぶきなれて中川むしの声

述懐
今ハとてうきよこふおもひいりぬへしのあとを〇とそおもひしえりかへし路

続古今
かりそめの今朝たにまよひつゝみやこのさとの宮の夕くれ

九条歌合　雪
寂蓮法師
十月ハはかふ行つきのうへまつりなふそう〇と云
山ゆかん越ゆる末の行さきあかしくものはれ〇ふハうきまつりなり
あるふに〇ふのかりてはうきゆにてろふにくもりてハ雲ぞ
如むさかりしふりせにはの跡ともとかくり行きて時雨のかれとらう
のかりくれハとこ侘りなり
まひの行う雲かむに〇ぞはきゆれハおもられハ袖のまへにとりなる
その歌のうちに　寂蓮
ゆきちりれおぬのおもしえとさそふて三年のさとにありあらふ
出雲のきつれのをにまいりていつもにの迚ふて
いつもにふりれにゆきかとかもハあらふに清らふ和歌の浦波

日吉社会　社頭祝
やりくちの庭にあそひのとき思ても世にと祈るこの
後白川院くもかりもてのちの仏事ともて経房卿奉
行ときこしかはせるも御ある事て取物て彼卿のもとへ
卩つかはしける
玉葉
いにしへのきくにふものも法海入月のあとりけむさくら嶺にあり
入し
あれ歌てことらて月のかくしちりいとこころのやこに海

続古今　瀧路の釈迦とこはさて
鷲の山ふかくいり教のうへきらてさるのこ家にたつの月
民部卿経房於吉田堂の色紙形に無量義経十功徳
品文曰是経本従諸佛室宅来去至一切衆生発菩提心
白ひらしものこの法の衣のもとしくとあるハ黒染の袖
寿量品
世をわれもかの梅さしてやさかきてかうあめもとめの月かけ
此歌にあるとやのよやのあるふ有ききとる

しかのうらに鶴とる行田の袖さえて久敷ふこゑかゝるかな

建仁元年大内にて浄菩提の為にて御製

雲の上にまた有明の影はなれとも雲の上の影をしたふなき

浄土し入てたゝし给せてられて

いかばかり雲井の月もおもふらんあはれなりし花さきのあるゝ匂ひと

後千載 世をのがれて後 後徳大寺左大臣 実定

よの中にいづれ出ぬとおもひしは浮きさらしせられしとおもふにいかのあはれ

久し

人をさへいとふなかりし世の中のあはれなりせば世に出ぬとは浮世もしてなき

伊綱かもとへ送りしもはなも風をきくといふ事を書て寄

見る浮のよにいひいて書かくも雲て

知る人あやまちの心にそみて志ありし人も渚にあり(セイ)ければ

久し

にしのかたをうたへ渡ちとりとも見せらるゝはさしてあるをしはたに

前住聖人熊野にこもりける時正月に下向せる人につきて法

同 川のくだりし文のおくに今見る事を筆に書かれたる事と書て

同 かはらしく熊野かけりをえひてこそは誰このそとに人に書く事てちかひける

久し

同 君さへ人おもひきりこそゆるのはやしかく我いのりよをいひしかるを

ころやこ椋の浅香山公衡卿の目にいつかりけり

同 かりひとやあはれはころやこの色とかゝる印の位にならんかのは

久し

あるさとは鹿卯のもとにあかさるとも世かなる秋の月はかはらし

玉葉 人丸のもう詠みかきしりとに柿本明神にまゐりて

いかきかゝひと芸のしたにてこのうはいはのこれか柿のおもひいしもや

本ノくにに 久しとてよひかされ詠まれてもこなる

おもひきのかゝひらしのとまのに染らいきるに、めしたの行諸知りてよ

高野にこもりしこまかるらける時峯相入道やまひよふりていで

教長公

今ハとおつかれは頼輔卿をかすりけんとてまかりける後に対面して

後かのゆ山まの行がらるをしくてはせて、つかりける

新古今
ちきりきそいつに何はてゝあかりせん行とすれ山の端の志らく雲
同
契りし身てもあれき深をあかめても雲となりかし人何そ宗
久し
桜井の伝ふる色絵て後年久しくありて彼地ゆひゆる
山里をなりて見なれハいと物さひしくあれはてゝ庭も
笹も秋の野らとなり侍りなれハ
同
うへ置し誰れのたね成も秋深野らとなりてぬとハ思ハさりなん
法のあしやとふ所ふ志ばらくあそびぬされ布引の瀧見て
なりつて月の出るまてありける
山寺ふ雲の志ろくこともなかりし月さへかつる布引き瀧
仁和寺法下覚性ちり九月ハかりふ
宮あかね月もとをく成る山さくらこハそハ忘れ名乎をかりなき
返し
山さくのあたのあハれびこハてこそ月見へ志けり忘ふまうれぬ
鶯葉入名のめてたう

かれぬとて忘るいなれし月のけふ様につゐやとにかミ岑深ゆく
返し
あつさりし名残の深をあはれふハなきこいて来し山の端の月
三輪の社ふ参りて志ばしの杉ふ申伴侍る
こゝの身ふ何事もいくたびあるらん杉の本を暗ふやとかなせて
住吉ふ詣てゝ侍る
娘ふ侍る本を来ても志られぬとこしらの松あるとて汚の音ハ
西宮秋田ふ　杜間登葉び
いろかれ志ののりのつかもこゝも手枝の志げく雨ふそふらん
出雲の大社へ参りけるときゝの国懐緒り侍るかくと
きゝてあふこうるハさうしあとハいいつりて
いふへそかりいつまのひもあくへてそなるなその世へまひび
久し
あやひあまもハへる清ら雲もあかりなり清戸もこゝまりぬよも八重垣
いあをかびなりて名ふ野中の清水立てかまいれるそく

彩後撰
くむ人ハ又いかにならむも野中の清水なかひりともかな
出雲の大社にまうでゝ見侍りければ八雲立とよみ給ひけん山端
ちかくしてさきのみことの御代のことかはらぬさまなる
やはらぎのみちやあまねくつたはりて入ちきし端にたつなき
きねのこゑもとほくおぼえて
いつもこはふれみなとにぞうらなれはもろこしに流るゝ和歌のうら波
うらの名かいはひちきりそめつゝ秋後は後の方に名あるに
そこなるにの音をかやせばのほとりて彼はしむきき山の麓に
住まひなば春をしりて秋にもなかりければさのくさやいて
出ゐるきとしも人ゐまいきくかはしになかりなば出ゐる心さそて
めぐりしみかのりの車のさとにも行さきをきこえけれハやすらふれ
山人のおもひやりなり
行暮るゝ人も宿の浦にとまりめぐりて都にもあらし菖のうらなき
かくて後日此の山住の端でやうやくて見ければ人の音もし侍らで
住の主きこのこゑんかなしひなり

これもこゝに身のゆくかたに松の世のことのこゝろをかさねて秋流めぐる

三宮

うつひとのあるこのこゝろありしときてあやなきあるやことを知るらん
ちこの海端こゝろの（本くく）はてに私とめて海路もいかきかなしきぞ

神祇

のどかなる心の中に思ふと神とわきての心をぞ知る
ちはやぶる八雲の上の御代のよの末にかけていつものいかにしへの
万代に松かけるうら深くゆかしくもあはやとこのしの神
さうのかたの和歌のうら波たちかへりてめぐるもたえき玉津嶋姫

野

故郷にむかしもきさらぎくてうたあらぬこと端で野への枝にふれ

台池菖蒲

あれはてし池のみぎはもあやめ草ふつかにて今折らひけり
行やみる草かたしく合ふさまうるそでぞく石も池のこゝろも
あやめ草今日ぞしる池水にうつるかけ石も行すとみえけり

遠山郭公

へだてなきゆく峯も志らくとめくりきえにみちのおくの雲に入ほとゝぎす

雨後夜月

夜あらしの峯にはれゆく雨のなごりを月ハみえつゝあらし

處々照射

いかにして鹿ぞ立ならし志のふむらしのひかりハかすかなる志けき山

家々納涼

とまひとのいとやすらかにせきいるゝふく山の井のいし水

霞

ちりとおもふハ千里のかすみもひとつにて霞のうちに行末の

春ハあさひさしのかすみハかすみもはるかなる紀州明かの方

端午

人知れぬ淀野にあやめてあやめ草志のはなやかの妻のこゝろむ

槿

あさ明の月ハのこれる日のうけにもきえ行く花ハ行さかりの朝

閑居

よの際にて庭にうつるも鹿の音もこゝにふうと紀なともなる

晴

雲ゐるゝ遠の峯のしえてこせハ本くく庭のとめきなりけり

五月雨

ふりそめてきえくえし庭うつるを知る川ぞ清く五月雨の比

さこそわすられもかゝるの清水さへこゝにもあるをかたらん

五月雨よむ渡の瀬ぞ見えてこせハ下のおれ雲ぞ汀なり汁瀬

あさ人よいふ日のきぞや川浦や木の御うち物清さるれの江を

さこそわするゝ川のたゞ中川波の音し千とせ生の瀬中のうつもの

むとくき本くくさしゆつるひの山のさふさもあるゝ月ハ生かず出かけ

花すゞやうの星明月夜のうつゝのかふ志のかふ鳥のいと声

うつひとのあるをむつまし語られと雲路をなくかりくきよを

右三首詠しを

將軍

しらこのかいのむすふ海にてしつきて後はかなくうつろふちりの月

千載
おもひ説の若くなりゆきて明ぬれハ行いても昔の○にあふつらん

悲の歌としてよめる

高野にまいりてよみ侍りける

あかつきを高野の山にまつほとやこけのしたにも有明の月

弘法大師入定しまひて弥勒菩薩の出世をまち給ふなれ
元亨釈書ニ云承和二ノ年空海在ニ金剛峯寺ニ三月廿一日結ニ跏趺ヲ
坐ツ作ニ毘盧印ヲ泊然入定ス先七日共ニ諸弟子ト念ス弥勒宝号ヲ至テ
此日ニ瞑ニ目ヲ気絶ス蓋シ持ニ定身ヲ待ニ竜華ヲ也年六十二ニ
竜華ハ弥勒の出世をいふ也　此歌の苔の下にも有明の月とハ入定
してかりにまつあかつきの暁の縁に有明の月によせて詠る也

同
寂然法師しるさせる百首の歌の中ふ旅の歌としてよめる

同
花根ふこゝろの志ぬはおもひしさきて雲ふ出ぬる中ふ入れのえ

読しくそ

同
出の○ハあさりのうみのかくて秋ハ末葉のいろにかき行りける

同
さひしさにうき世をかへて志のはすハひとりきくへき松の風かハ

うき世の住うさに山居のさひしさをかへて堪忍されハひとり此
松風でもきゝとりはてあるまし　山里ハ松のさひしき事をいへ
世のうきよりハ住よかりけれ此歌をよめるなるへし

同
賀茂の社の歌合ふ述懐の歌とてよめる

世の中ふうきハいつもかハらねと思ひしるこそいとふなりけれ

世をうきとおもひ知れハいとふこゝろも深くなりて此世も中々く後の世
をのねかひもふかくなる歌なり

新古今　釈教歌ニ

うき草の一葉なりとも　不偸盗戒の心を　盗ことなる事を戒しむる也十戒の内也

いそかくれおもひなかけそおきつしら浪　寂蓮（イ然）法師

磯隠とハ人のこゝろにかくしてのかくし事なくても盗むこゝろなかりけるとし

沖の白波ふかけるを添して波を盗人の事ふしたつハ後漢霊帝の時黄巾の

賊乱でかこせるを漢書注ニ西河白波谷ニ云　此歌ハ寂然法師也

夫木
ちからなきいたつらの世のたちかへりまたさかりなるこの世なりけん　寂然法師

作是教已復至他国のかた

新古今

世をすくふうちにはたれかいりぬらん誰かの行との方かな　寂蓮

是歌ハ寿量品の文也是之文の心ハ医者の智ありし人の子を持て皆子ども
親の見ぬ内に毒薬をくらいて病みつきしを親他国より帰りて是を見て
よき薬を作りて毒薬飲みし子どもに与ふるに親の言葉を聞きてよき薬を飲む
其時親薬を子どもに授けて我は他国へ行て使をつかはして汝が父ハ
死したりと告させけるに子ども驚て其薬をのみて病い癒へし如此仏の
在世に法を説て悟を得る人ハ煩悩の毒気を消して仏の説を信じて仏の
入滅の後残し置る経文を以てこゝろを得るハ煩悩の毒気なく入て消へ
さとりし此心を歌に詠て世をすくふ内にはたれもいりぬ世ハ煩悩の闇し仏の
ましますとハ子どもに薬を授けおくし我が行方ハ他国へ行きたまひし法の心ハ
他国より使をつかはして死したると告るに諸の子どもの心をさましめたるなし

△寿量品ニ云是好良薬今留テ在此汝可ニ取服ス勿レ憂ヘ不ト差ヘ作テ此教一已ニ復タ
至テ他国ニ遣シテ使ヲ還テ告グ汝カ父已ニ死スト　この文也

十訓百首

後の世のこと深くしきえの契し傍行さへなきものをこそ

傍行さハ麻の名也傍の時分麻を刈人傍行さと云草生ハ伊勢の名所也

法印慈鎮歌集　　天台座主六十二代

五十首歌よみし時

五月雨のふる江の水に流れても法の袖にやどりき

梅路家百首歌合に　桂川を

うつりゆく行へもしらぬ水の面に川瀬の音の哀なる

夜の歌とて

雲のうへに月をみるにもあはれこそふかくなりぬれ夜もすがら

百首歌よみし時

夜もすがら人をこひしく思ひねの夢もさめてや行かひの跡

いかにしてはるかに見えし月の影の中に

うき世のうちに行きかへりても猶そ恋しき

かきくもるはるの夜のいく月の中に

ゆきかへりてもなほしたふ心の夜法月

うき身にハかゝる思ひもなかりけり法の月

歌しらるを

和歌所歌合に　田家月

雁の来る伏見の小田に夢さめて寝ぬ夜の庵に月をみるかな

千五百番歌合に

あき鹿の声にめさめて志のゝめのそらにそ萩原のつゆをいとふ

題しらす

衣川そとはまくらにそかへるやかしこの萩はいく夜のつゆ

五十首歌奉りし時　月前聞雁といふことを

大江山かたふく月の影さえて鳥羽田の面におつる雁かね

千五百番歌合に

あきかせにあともなく家路とはゝいつのハらつゝなるらん

春日社歌合に　落葉といふことを読て奉りし

木の葉ちる宿にかたしく袖のいろをありとも知らて行あらしかな

時雨を

やよしくれもの思ふ袖のなかりせハ木の葉の後になにをそめまし

題しらす

もミち葉ハをのかそめたるいろそかしよそけにおける今朝の霜かな

百首歌の中に

君か植るやまた田の穂のひとときかる人なしふのこ穂かれ

題不知

網代木にいさよふ波のをとふけてひとりやねぬる宇治の橋姫

庭の雪にわか跡つけて出つるをとはれにけりと人やみるらん

ありむしろハ夢のまに有明のこゝろいとゝ行れとも

同行なりける人うちつゝきてはかなくなりにけれハ思ひ出てよめる

あるさすのこのありなからやいさゝ行なき北山の山路とも中のこゝろ志るへの家

十月ハかり水無せに侍りし比前大僧正慈円のもとへぬれてしくれのなと申つかはして

次の年の神無月無常の歌あまたよみてつかはし侍りし中に

太上天皇

思ひいつるをりたく柴の夕けふりむせふもうれしわすれかたみに

返し

慈円

思ひいつるをりたく柴ときくからにたくひしられぬ夕けふりかな

覚快法親王かくれて周忌の比墓所にまかりて
そこはかとおもひつゝけてきてみれはことしのけふも袖はぬれけり
旅の歌とてよめる
東路の夜半のなかめをかたらなん都の山にかゝる月かけ
詩を歌に合せ侍りしに　山路秋行といふ事を
たつた山秋ゆく人の袖をみよ木々のこすゑはしくれさりけり
百首歌奉りし時
わかこひは松をしくれのそめかねてまくすかはらに風さはくなり
摂政家百首歌合に　契恋
うきものゝめくるよ人はいとのいつはりをねてなまはしてもうちなか
恋の歌とて
こゝろあらは吹すもあらなんよひよひに人まつやとの庭の松かせ
摂政家歌合に　尋恋
かよひこし庭のむらはきうつろひてふるさともすさきのゆふくれ
こゝろこそゆくへも知らね三輪の山杉のこすゑの夕くれのそら
暁恋の心を
あかつきのなみたやそらにたくふらん袖におちくるかねの音かな
恋の歌の中に
野辺の露はいろもなくてやこほれつる袖よりすくる荻のうは風
春の比大乗院より人につかはしける
みせはやな志賀のからさきふもとなるなからの山の春のけしきを
寂法印にあかりんとするにはそもあらはなにかあらめて行なからめのこや
五十首歌奉りし中に山家月
山さとに月はこゝろとはこそ流れゆくなみてこのこゑをもとふ
五十首歌めしし時
ながめへて月はあはれもいさよひの山のはをゆく雲の暮
和歌所歌合に　海辺月といふ事を
わかのうらに月の出しほのさすまゝによるなくたつの声そかなしき

五十首歌奉りしに

次第の冥ゆめぢとぞなるあとの声ぞおもひもらして岩を切るなり

歌しるを

世の中びこゝろうくもいとふか卵ぬのなかるび身沈かみひにて

五十首歌よみ侍りしに

たぬきってく岩の戸をさしておのかこゝろのおくもこゝろしの中

題不知

中らさとふ宿とりなめておもふ卵世にもむひとのこゝ路なかりさび

草のいおびいとひても又いらせん家のいのち流かけ緑り

山家の歌よみ侍りしに

山さとふこひなつ宿とのとくさハこのさとぬきえそら中宿し人を

題不知

田舎の人のさ花のいろしびらる哀ハひとハころ人を中かうしの名

心り○をせびをむりんといふいとのおかしうとふやけまもあらハむ

五十首歌奉りしに

世の中びをわすく流るふかつ君流うき身ハうろをされと終なれ

御かくる時無動寺にて

ふあらしいつる寺の昔のなごりにいつしかららむかしをかし人まし

述懐の心を

あふとしかりおもひとさとしいつくこゝろあくさればみてそ妙る庵き

いろくふをわかしことやなきうまん。うけられ身の中ふられの流り

うちうきえて世にあるうみにハいつく○ともいつくるをちふもつゝみそるか

初歌所にて述懐の心を

中にし里にちきりしいおやあまもなくむちてまんとうたおかいさりしを

五十首歌の中に

おもふとなとうかいとのなかるむいつかきハ流るふに月をさやさきき

いかしていつ中て世にハ名明の清きせぬものびいとふこゝろび

世の中のなかれて

なふ中てハ心とびあさされて会にけしいらぬ身のう人に出んともとらん

此歌新古今にハ大江嘉言詠とあり

題不知

世中といふハのこゝろ清くつゝにも頼しつゝそいとゝなりゆき
ちひいよふこゝ路のふくなりちくにをとる月日ひうちかさね清く
むとゝたかきひらふしこゝろふハなひをひり御く弟ひいつふせむ
あか世へまこの世をふくいとふ我としいよのこえりし申そくゝるん
かきふへき罪のちの世ハ何るハあれりなきれハなをハこのよにハもとめ

百首歌奉りしふ

いつる是三年のさとのさ到きに何りしと有りてひとしにご覧ん

神祇の歌とてよめる

世りくら御ゐらふ何ゆりそれやいそくかゝるの何れ玄奴の月

十首歌合の中ふ　神祇を

忘といの御こゝ路のいろひひとくりゝてもののゝや法何きの玉ゆえ

最勝四天王院の障子ふ小塩の山かゝれたる所

小しふ申し神の志御を十川の祭ふちぎりしいろハ久御ゆのは

日吉社に奉りし歌の中ふ二首を

やはらく御影ハあまりにてりかゝれことゝのかたハ罪ふをもとめとも

述懐の心を

けふの日七法やしろのゆふさをそれ方も六法こゝちふかく人をも那
そらまへて日吉のうけハくりなをあふさゝ何やきゝのふかふかなれ
まかひよの御ひかりのをこ川の浜のわかにこゝ路をもしきしての青の那

六の道ハ　地獄餓鬼畜生修羅人道天人の六道也　下句ハ輪廻をいふ
まふかと神なひ何ふしむし

小野ふおそて奉りし

きあぬまもハあかのいのハ捨て捨沙をあくこゝろ清くしのいふ人の翁

述懐の歌の中ふ

神かりくハ志は世をもちふ届をもひてかはすやせまいしの法こゝの火
らく浄法きくの志ろをもるハそれて流しとめてきえん事かしさふ
経来へ申しけこゝ路申れ清りもとをつゞのあ申こ志りしいて御まも

法華廿八品歌の中ふ

方便品　唯有一乗法の心を

いつくにもわか法なれはのりのやかて行くかへるみちにそ入へき
化城喩品　化大作城郭
かりになすやすらふきよの中ゐしてゐるかたにもやとりはゆかん
分別功徳品　或住不退地
鷲の山今日きくのりのみちならてかへらぬ道にいる人そなき
普門品　心念不空過
となへてもひなきをりとかゝりしにはなさくめてはむなしかれのくも
五百弟子品　内秘菩薩行の心を
いかへの鹿なく遊のいつはりにもこゝろの月はくもらさりけり
右新古今にのせてあり
天王寺西門にて
おしなへてなにはちのゝ海の浪かえしむかしの雲を吹ちらすかな
一字抄ニ　故郷郭公
わくらはにふるさとのこゝにきかれはとふ事きゝてのこゑのいろかな
言津の文ハ称津も

夫木
音羽山卯の花さかりにさきぬれはいよの行は雪の世の花
きくとなくよるのこゑのむしつきことにゆきとなりぬれはちとりなく
なか月もいくよあかしになるらん行きちの月法いとくさしゆく
千載
山のはにいりぬる月をかけふかきにもてきれの空はゝる月そてらさむ
新〃〃と
同
月のけのいつはりのちにかりにわかのまよりはるのかけの色
新〃〃と
同
あかりけなくうきこの世の民にわかれふわか雨は雲川杣にたもとのあめの袖
右首云此五文字なる時に卑下してはわか身に應せなかれの心し
飲の心ハ法徳も至らとして天台座主となりて上一人の寶祚（ホウソ）
長久より下万民の安穏快楽（ケラク）なる事を二六時中心にかけて護持
されハわかにも應せね事となるへし　叔うき世の民尓おほふとハ佛菩
大師よりの法衣で一切衆生にあふふとなるへし　或る杣ハ比叡山也
彼仏菩の浄飯よりいひつけらるし所のくそく三千年三かさいの佛

わか立杣に冥加あらせ給へ墨染の袖を位の宮におほく
師説わか立杣にて墨染の袖をおほけなくもうき世の民におほふ
とし王城守護の山にしてわか墨染の袖を天下の民におほひ
て二世安楽を祈るのみ事を加へ護せ給ふなるへし 後京の歌の京にある

同
題しらす
寺ならて秋のあはれもしらぬ志の人ならや野にも山にも家こそあるらむ

同
鹿の歌とてよめる
山里のあはれをしらぬ法鹿の　ハ鹿ハのあはれの　かきりなりしけり
鹿半のあはれ深き　ある中に鳴えたる鹿の声に佗しき事の外ニ京
ねられぬ夜の月あはれ也　近き詞にや

永元の山に堂衆学徒(カクト)不和の出来りて学徒みなちりける時
慈鎮千日の山こもりこもられん事もちかく近江の嶋てよまんとひ
あきらて遂に山の洞にこもりて侍りける折にかなしみあはれハ
あるまりふた慈鎮法師のもとにつかはしける

同
いとゝしくむかしのあとやたえなんとおもふもかなしけさの志らせ

学徒離散せハ台家の学絶て智者妙楽の釈義も伝教慈覚
の伝法も跡なくたえん事を歎きの人に告ありて居も堪まていとゝ昔の
あとやたえなんとのかなるへし

慈鎮法師　宮内少将伊行子

同
忘る名を待ありかへんとして本にむかしのうたのあれなとも
慈鎮のく我執(カミシフ)の不和を歎きせ玉ふをあはれ感じてのかなるへし
悲し

同
けふまての日よしの神のけハおほくのそのとにてもさくらめやハ
述懐の歌の中によみ侍る
日吉ハ叡山の鎮守勿論也 日数かさなりて其影ハ宗のとに山居せし
栖のかくれてもてらしこぬ事ありしきりんとも戸かさてさくらめやハ自然
の光明あるへし 延喜式神名帳ニ云近江国滋賀(シカノ)郡日吉神社
同三　名神祭部ニ云日吉神社一坐　注ニ比叡神同ニ

同
きのふの世にあるこ旅寝して草ゆへ露の中も旅そこゝろ哉
旅の歌とてよめる